編集：荒川の昔を伝える会
発行：足立区荒川ビジターセンター
ＴＥＬ　５８１３－３７５３　FAX　３８７０－８５４４
〒120-0034　足立区千住5-13-5　学びピア21　4階
HP：http://www.adachi.ne.jp/users/ara-vc/index.html
E-Mail：ara-vc@adachi.ne.jp
スタッフ常駐時間は午前９時～午後５時です。

荒川の昔
―暮らし―

荒川の昔を伝える会　編

荒川の昔ー暮らしー

荒川の昔を伝える会　編

《表紙写真》　石坂満提供
昭和38年の常磐線鉄橋を走るSL・C57、 下り·成田行き。 後ろには千代田線の工事が見える。

はじめに

「地元に長くお住まいの方々の荒川についての話を残したい。」
第１集「荒川の昔―遊び―」に続いて、テーマを決める話し合いの場で会員の皆さんからあがった希望でした。昔の記憶が失われ続けていることの危機感を肌で感じているからです。

会員の知人であり、荒川放水路の近くに長くお住まいの方々にご協力頂けることになり、貴重なお話を伺うことができました。また、第１集の遊びを含む「暮らし」をテーマに、荒川と暮らしに関わる幅広い話題を載せました。

「荒川と暮らし」は大きなテーマです。荒川での様々なできごとがすべて暮らしに含まれます。荒川の話をしていると、当時の懐かしい暮らしぶりに話題が飛ぶこともしばしばです。それだけ、荒川と社会の状況や暮らしが密着していたのだと思います。この本に書ききれない日々の生活、社会の流れがあり、荒川の記憶があるのだと感じます。

こんな思い出がたくさん出てきます
- 戦後まもなくはたびたび停電した。電熱器を使っていたのでヒューズがよく飛んだ。だから、石油ランプが広まり始めた。
- 荒川の土手は空襲の避難場所になった。みんな荒川の土手に来た。
- お化け煙突は石炭を燃やしていたから、もくもく煙を出していた。

なるべく多くの荒川の記憶を子どもたちに伝えたいと、会では活動しています。多くの方々のご協力を賜りながら、微力ではありますが、これからも荒川の思い出を編さんしていきたいと考えております。

足立区荒川ビジターセンター
２００７年３月３１日

この本の見方
文章に続き、「質問」と「答え」をつけてあります。これは、内容について会員同士で話し合って補足したものです。話をお聞きした方が直接答えてくださったものについては、その旨記してあります。

おことわり
内容については例会で質疑を行いましたが、記憶を大切にしたものですので、調べがつかなかった点があります。
また、記述の中で現在では使われない言葉や表現が含まれていますが、当時の様子を伝えるものとして、そのまま使用しています。

写真で見る荒川とくらし

昭和のくらし （昭和のはじめ）

←《荒川の五色桜》
重箱にごちそうを詰め、家族連れ立って花見に行った。桜の下でござを広げて大人は一杯飲んでお花見をした。テレビもない時代、江北橋の少し上流はお花見の人でごったがえしていた。

写真：足立区提供
「写真で見る足立区40年の歩み」

→
《大正時代末か昭和初期の千住の祭り》
経済的に豊かな人たちが住む地域で行われた。奥に見える電柱は明治時代からあり、東京で一番最近まで残っていた。警官の腰にはサーベルがついている。

写真：足立区提供
「写真で見る足立区40年の歩み」

←《写真館》
近所の写真館のご主人は、学校の遠足にいつも付いてきて写真を撮ってくれました。
三脚付の箱型のカメラを持って、一緒の電車に乗って、一般のお客さんも乗り合わせての学校遠足でした。

写真：足立区提供　「写真に刻み込まれた足立区50年の軌跡」

昭和のくらし （昭和20～30年代）

←《棒手振りの魚屋さん》
魚屋のモトさんは旗本五千石の子孫。冷蔵庫がないので、朝仕入れてお得意さんをまわって売り歩いていた。天秤の後ろの飯台にはまな板などが入っていて、その場でさばいてくれた。
棒手振りの人は昭和３０年位まで見かけた。
写真：吉田千伊知提供

《荒川放水路》→
川が汚れて臭くなる前の風景。川に浮かんでいるヨットや船は貸しボート屋で借りた。ヨットの借り賃は船の２倍の値段だった。
写真：足立区提供
「写真で見る足立区40年の歩み」

←《千住の花火》
戦前の花火は数分おきに一発づつ打ち上げられた。花火が開くと、「たまや～」「かぎや～」とみんなで声をかけた。
戦後の花火は昭和２４年に復活した。復活してすぐの花火は、打ち上げた花火の数が少なく、さみしい印象があった。
写真：足立区提供　「写真で見る足立区40年の歩み」

昭和のくらし （昭和30～40年代）

↑《満潮時の荒川》
洪水のときではなく、ふだんの荒川の満潮時の風景。河川敷が水びたしになった。満潮時でもぬれずに歩けるように、河川敷に桟橋がかけられていた。
写真：石坂満提供

《ベーゴマで遊ぶ》→
路地裏ではどこでも見られた。
写真：石坂満提供

←《金魚売り》
「きんぎょ～え、きんぎょ」と低くのばす声で売っていた。夏は他に氷屋さん、アイス屋さんもいた。
写真：石坂満提供

←《ボロ市の縁日》

現在も続いている千住・勝専寺（通称：赤門寺）のボロ市。「赤門寺のボロ市」と呼んでいた。昔は毎月開催されていた。

写真：石坂満提供

《紙芝居》→

拍子木をたたいて町内を回りながら人を集めた。お菓子を買うと紙芝居を見せてくれた。後ろでお金を払わずに見ることもあった。

写真：石坂満提供

←《都電での切符売り》

車掌さん（男性）が切符を売っていた。当時バスの車掌さんは女性の仕事だった。「お詰め願いまーす」と車掌さんが呼びかけて、人々はギュウギュウに詰めて乗っていた。

写真：石坂満提供

写真で見る荒川とくらし

昭和のくらし（昭和のはじめ、
２０～３０年代、３０～４０年代）…２
荒川のうつりかわり１……２５
荒川のうつりかわり２……３９

地元の方にお話を伺いしました

田ヶ谷正久さん……２７
川名安之介さん……２８
川澄巖さん……２９
阿出川信夫さん……３０
新井正一さん……３１
田中善一郎さん……３２
横山佐吉さん……３３
柳川峰造さん……３７
増田紀ニ六さん……３７
清水義允さん……３８

もくじ

みんなの思い出１

荒川左岸にあった牧場他……７
荒川放水路……７
地盤沈下……８
河川敷農園……９
千住新橋と関連した話……９
廃品回収……１７
レンガと運搬……１７
レンガ……２１
こうもり（蝙蝠）……２２
荒川の空……２２
天然プール（水練場）　……２３
赤水門……２４

みんなの思い出２

千住新橋の交番……４１
小菅の渡しの桟橋……４２
土手の上を走った青バス……４３
千住新橋を渡っていた都バス…４４
西新井橋北詰からバスに乗って…４５
柳原から荒川……４５
荒川における船運について…４６
荒川土手の踏み切り……４７
荒川鉄道橋と暮らし……４８
下肥の話……５０
おわい船……５１
水上生活者との出会い……５２
台風の洪水と土手と……５３
伊勢湾台風……５５
映画の荒川……５６

足立区を流れる荒川両岸の呼び方　……６０
昭和・西暦早見表……５９　　暮らし地図…６１
「荒川の昔―暮らし―」編集メンバー紹介……６２
荒川（放水路）・社会の歴史年表……巻末

みんなの思い出１**********

《荒川左岸にあった牧場　他》

（文と絵　三木美代子）

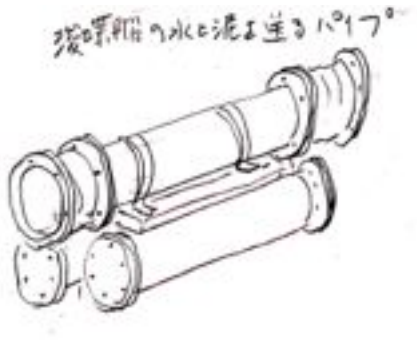
昭和１０年頃、土手の外側の現本木１丁目より扇町あたりの思い出。

千住方面より西新井橋を渡るとＴの字になる所に交番があり、左右にダラダラと下がる。右は梅田方面、左は本木１丁目と２丁目、３丁目、４丁目と長屋があった。家の脇にはドブ川があり、冬になると凍りつき、子ども達は下駄をはいて、滑ったりした思い出もあり、ほうきなど色々なものが落ちていた。また、牛舎、豚舎、鶏舎などが数軒ありました。戦後は、いつの間にか一軒一軒なくなって行きました。私の子どもの頃は、子豚が小屋から逃げてきて、おじさんが追いかけていた。鶏屋さんには朝早く、ザルを持って生み立ての卵を買いに行きました。暖かな思い出であり、現在は全部高速の道路となってしまっている。

質問: 戦後、牛舎などがなくなっていったのはなぜですか。

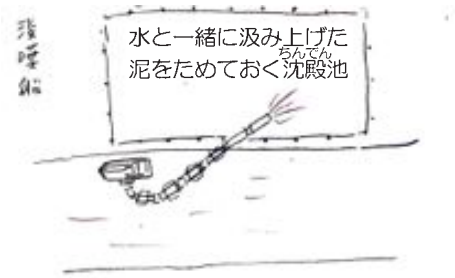
答え: 牧場がなくなったのは戦後人家が増えたから。家と牧場が近くなるとにおいや鳴き声が気になってしまうから。西新井橋を通って牛乳をとるための牛の牧場が１０ヶ所位あった。近くの牧場は牛が５０頭位いたところもある。小台橋の建設で小泉牧場は移転。時代の流れでしょう。

《荒川放水路》　　（文と絵　斎木武弥）



荒川放水路とは深い関係がある。私は大正１１年６月大井の三又で生まれた。父は海軍の機関兵で、そんな関係から当時の内務省に入り、浚渫船の機関士になり、荒川の掘削のため、大井から、柳原に越してきた(当時の住所は東京府下南葛飾郡南綾瀬村字柳原)。越してきて１年目に関東大震災にあっ

た。浚喋船は泥といっしょに水もくみ上げ、低い河川敷にパイプで運び地上げしていく。最近では、虹の広場、扇大橋のたもとの車椅子の体験広場（あらかわ福祉体験広場）、江北橋のたもとの野球場、サッカー場等等になっている。荒川放水路の通水は大正１３年。私が物心ついたころは、父は東京電灯の千住火力発電所、俗に言う４本煙突の火力発電所で一級機関士として勤めており、父に連れられ近くにきた浚喋船によく遊びに連れて行かれ、岸にある輸送管からこわごわ渡って船に着き、後輩の船員から流木で作った船をいただいた。船は長さが８０センチもあるもので嬉しくて嬉しくて長いこと部屋に飾った。その他流木のおもちゃを貰い宝物にしていたのを思い出す。今は家にはないが、居間に大きな岩淵水門の通水の時の額がかざってあった。



浚渫は水深を深くするなどの目的で、川底の土砂を川の水と一緒にポンプで吸い上げること。

質問：土手でやった学校行事はどんなものがありましたか。

答え：南綾瀬第二小学校分校では、家や川の写生、新橋のグラウンドで運動会、草摘みをしました。行事以外にも、放課後、三新川でシジミ採りをしました。

分校には３年生まで通学し、４年生からは堀切橋を渡って本校に通いました。小菅の渡しはあったけれどお金を取られたので使わなかった。堀切菖蒲園には１年生のときに遠足で行きました。そばに小高園もありました。

満潮時の東武線と常磐線の間
（昭和４０年代）　石坂満提供

《地盤沈下》（文　鈴木芳夫）

水道がない時代には川から水を得るか、井戸を掘って水をくみ上げるかしていた。人力で生活に必要なだけ地中から水をくんでいた時には問題はなかったが、動力ポンプを用い大規模に水をくみ上げると地下水はどんどんなくなり、水のなくなった分、地盤が沈んでいった。

足立区では戦後、昭和３０年ごろの復興期に急激に地盤の沈下がは

じまった。水はタダという考えから工業用にどんどんくみあげ、また大規模団地でも大型水槽に水を汲み上げたので、地下水の補給が追いつかなくなった。揚水は昭和３７年前後がピークで、以後は揚水規制が厳しくなり、地盤沈下はやがて治まった。沈下は止まったものの下がった地盤はそのままで、元には戻らない。地盤が下がったため、荒川の満潮時には河川敷が水浸しになった時期があった。川の水の浸入をふせぐため、運動場となっている今の河川敷には土盛り工事がされている。

《河川敷農園》（文　鈴木芳夫）

昭和１４年ごろから何年か、西新井橋そば、荒川北側（左岸）の河川敷にチューリップ園が大規模に設けられたことがあった。球根を採る目的のものと思われたが、開花の時期は赤・黄さまざまな色の花園が橋の上から眺められた。

西新井橋上流右岸にあった田んぼ
（昭和30年1月1日）　吉田千伊知提供

ところが、太平洋戦争が始まると食糧事情が悪くなり、河川敷には次々と農園が設けられた。河川敷はもともと農地のところもあったので、畑として作物を作るのは容易だった。（荒川が掘られるまでは畑か田んぼだった。）河川敷は公共の土地のため個人では利用できず、農園組合を組織して畑や田んぼを作った。耕作は写真でみるとおり、本格的なものであった。この農園は食糧事情が好転した昭和３３年ごろまで続いた。

《千住新橋（せんじゅしんばし）と関連した話》

（文　高原光雄）

①〔旧千住新橋（きゅうせんじゅしんばし）とは〕

私は１９３５年に足立区千住３丁目で生まれて幼児期（ようじき）に荒川を挟（はさ）んだ梅田（うめだ）２丁目で育ったので、小学校５年生の頃から時々（ときどき）は旧千住新橋を渡（わた）っていた。

旧千住新橋は１９２０年に建設（けんせつ）を始めて、４年の工事期間をかけた大工事で１９２４年に竣工（しゅんこう）した。

旧千住新橋開通式　（大正１３年）
「南足立郡誌大正15年版」　足立区提供

橋の長さ４５２．７ｍ、幅７．２ｍ、鋼板桁であった。そして開通式が大勢の参加者で催された。(「東京府南足立郡誌大正１５年版」より)

橋の四隅に親柱が立ち、その頭部と両脇にはほのぼのと輝く照明が取り付けられてあった。更に橋の欄干は鋳物製で手すりは鉄パイプだった。また橋を軽くするために路面の床に「木レンガ」(１５ｃｍの正方形で厚さ１０ｃｍ)が敷き詰められ、上にアスファルト舗装がしてあった。しかし１９５１年春頃にはそのアスファルトが歩行者や車のタイヤに削られて木目の渦巻きが浮き出ていた。

路面の床を木レンガにした理由はコンクリートにすると橋の重量が重くなるためであった。

木レンガ　15cm角、厚さ10センチ

日本銀行正門前の石畳
（2005年）　筆者提供

②〔石畳の坂道で馬車が事故〕

橋へ登る坂道には木レンガと同じ位の大きさ(１５ｃｍの正方形)で敷石が碁盤の目のように敷かれていた、１９５０年頃までは自動車が時々通る程度で車と言えば野菜やさつま芋やかぼちゃなどを積んだ荷馬車・牛車・大八車そして人力車だったから、坂道で車を引く馬や牛や人が足を滑らさないためにアスファルト道路にしないで石畳だった。また１９６０年頃撮影の写真によると馬の足には草鞋が履かされていた。

荷馬車　足立区内（昭和３５年頃）
「足立・荒川の１００年」足立区提供

１９４７年の真夏、日差しが強い時だった、路地裏で遊んでいた私は表通りの方から「坂道で馬がひっくり返ってるぞー」と叫ぶ声を聞いた。

駆け付けると坂の途中に人だかりがしていた、私は大人たちの足元から潜り込んで前へ出た、見るとかぼちゃを満載した荷馬車の馬が横に倒れていて口から白い泡を吹き出し、その泡が敷石の目地づたいに

流れていた。馬方は大きな声で「ソレー」と馬に気合を掛けていた、馬は必死に起き上がろうとするが立ち上がれない、そのうち群集の中から水の入ったバケツが渡されたので馬方はその水を馬の頭にぶっかけた。そして気合を掛けると馬は鼻を震わせて力いっぱい敷石を蹴って滑りながらも立ち上がった。取り囲んでいた大人たちから「ワァー」と歓声が上がった。

③〔アメリカ兵とチュウインガム〕

１９４６年の秋、学びピア２１の左前方で、現在、千住新橋上り車線あたりになるが、橋詰の土手の上に毎日アメリカ兵が見張りに来ていてジープを止めてガムやチョコレートが貰えると言う話を聞いた。私が友達と一緒に千住新橋を渡って行くとアメリカ兵が２人ジープのボンネットの上に腰を掛けていて、子どもが５～６人取り囲み、覚えたての英語で「ギブミー、ギブミー・チューインガム、チューインガム」と一斉に言いながら手を出していた。笑い顔でガムを噛んでいた２人のアメリカ兵は何か言いながらガムを１枚づつ配ってくれた。

私はそのガムを生まれて初めて噛みながら新橋を渡り家へ帰ったのだが父親からひどく叱られた。父は「家をアメリカの飛行機の空襲で焼き払われ、皆がこんなトタン板のバラック小屋に住んでいるのに」と怒っていた。

当時のアメリカ兵は進駐軍と言われ、占領に反対する日本人が武器を持って通るのを警戒し、国道などの橋の袂でＭＰと書いた鉄兜をかぶり腕章を付けて見張っていた。

④〔対面交通を守らなかった橋の上〕

１９４７年に制定された道路交通取締法が４９年に改正されて、人と車の対面交通が実施された。これは交通事故を無くすために人は右側、自転車など車は左側を通行する規則になったのだが殆どの人が理解できなかった。私も学校で教えられたが、車の方がクラクションを鳴らしながら人をよけて通るものだと思っていたから、車が人にぶつかるので対面交通を守れと言われても分らなかった。また当時は車が時々しか通らなかったうえ、千住新橋上には歩道と車道を区別する白線が書かれて無いので、歩行者は誰も規則を守らないで橋の右・左・真ん中を自由に通っていた。

その頃、千住新橋の北から橋を渡ろうと橋の左側を歩こうとした私は、北詰交番の前にいたお巡りさんから「おい、こら、人は右側を通れ」と注意をされた、交番はアメリカ兵がいた所から川を挟んだ反対側の北詰にあって、闇物資の取り締まりなどをしていた。当時は交番のお巡

千住新橋を通る女学生　（1954 年）
「足立区50年の軌跡」 足立区提供

りさんと聞いただけで子どもだった私は恐かった。

その５年後１９５４年に撮った左の写真を見ても分るように千住新橋上は車の往来が少なく、中央分離線も路側帯の線も書かれてはいない。人は対面交通に関係なく橋の中央や左右を自由に歩いているのが分かる。しかし自転車は左側通行を守っている。これは当時、自転車が高価だったため大切に使っていたからだと思う。

⑤〔露店に挟まれた千住新橋〕

食べ物が不足していた時代、１９４５年の秋頃から千住新橋を挟んだ日光街道（国道４号線）の歩道上で、当時日本人が売ることが出来なかったヤミ米などの闇物資を、朝鮮の人だと日本の法律に縛られない外国人特権で売れたことから闇市が生まれた（「ヤミ市模型の調査と展示」）、日本人は鍋やヤカンなどの日用品や家畜が食べるような粗悪な食べ物しか扱えなかった。
闇市は新宿や銀座など人通りの多かった国道沿いや駅前などの広場に出来て、日光街道は１３間道路（約２３ｍ６６ｃｍ）と言われ広かったので毎日闇市が立った。

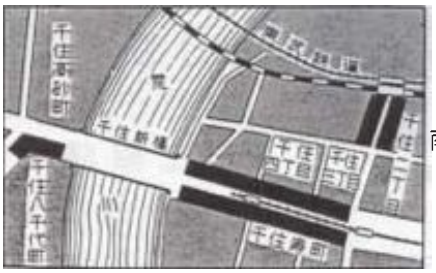
１９４７年の春、小学５年生だった私は、父親が焼け跡の畑で育てたナスの苗を「あまったから売って来てくれ」と言われ、２０本ほどの苗を箱に入れて千住八千代町（現、梅田１丁目）の坂道の途中にあった古本屋前の歩道で商売を始めた、現在は新橋屋と言う釣り具店がある所で当時は古本屋であった。

私は道端にかがんでナスの苗が入った箱を前に置いて、ただ黙っていたので１本も売れなかった、３時間くらい後に地元の暴力団が来て「ショバ代の金を出せ、無ければ店を片付けろ」と言われ、私は恐くなってナスを入れた箱を　持ってすごすごと家に帰った。ナスの苗はその後、畑の隅で枯れていた。

兄の話で分かった事だが、闇市の世話人の仕事をほとんど暴力団がしていたが、闇市に出店したのは朝鮮の人が多かったと思われる。

露店が出ていた場所は東京都臨時露店対策部が出した図面によると千住２丁目の交差点から千住新橋の南詰までの両側と橋を挟んだ北詰、梅田１丁目の側だった。

足立１丁目側に露店がなかったのは交番のお巡りさんが闇物資を運ぶトラックを止めて調べていたからと思われる。



千住新橋近くの露店出店地
「露店」　東京都発行　東京都臨時露店対策部編

１９５０年３月１０日の露店出店実態調査によると、出店の数は千住新橋の南側では区役所の占用許可数が５１店・警察の出店許可数が３１店で、北側では区役所の占用許可数が１９店・警察の出店許可数が３３店と記録されているが、実際には店がびっしりと出ていて、荒川の昔を伝える会の齋木会員が見た様子によると、出店できなかった人たちが橋の南詰の土手の上に千住新橋を挟んで両方に１０店位づつ店を出して、建築用のノコギリやカンナなどの工具や鍋や釜などを売る店を出していた。

空襲で焼け野原になった焼け跡に残っていた鍋や釜やガラス類は溶けてひん曲がり使い物にならなかった。そのため空襲に遭わなかった工場などが鉄兜を叩いて釜を作ったり飛行機の部品だったアルミニューム板などを使って鍋釜に作り変えていた。

兎に角、食べ物など全ての物資が不足していて、今では想像が出来ない状態だった。

都電が通る千住の露店の様子を撮った写真は残ってないが、１９４６年８月３日の朝日新聞に掲載された”新宿通りの風景”とまったく同じ風景で青空の露店通りだった。

新宿通りの露店
（1946年8月3日）　朝日新聞社提供

屋根のない闇市から次第に屋台のようなシートが張られた露店に変わった、そして露店は午前中から始まって夜になるとカーバイトのランプの光がキラキラとした夜店の並びに変わり賑わったので、私は興奮しながら見て歩いた。

この露店は歩道上に店を作り店番の人は車道上にいたので、都心などでは車の通行の妨げになると言う理由もあり、露店は１９５１年中に廃止になった。戦後の風物になっていた闇市の露店は出来てから約５年でその姿を消した。

⑥〔橋の拡幅から架け替えへ〕

１９５６年に千住新橋の両側に歩道を継ぎ足した形で取り付けられ、歩道の部分が拡幅されたので橋の幅が７．２ｍから１７ｍになった。

「足立の交通誌」に掲載された写真を見ると取り付けられた歩道の様子が分かる。また風情のあった欄干をそのまま横に移動して使っているのが分かる。

千住新橋北側より
（昭和４６年）「写真に見る足立の交通誌」　石坂満提供

その後、車の数が急速に増えて道路が渋滞したために１９６８年に都電は荒川線だけを残して都内から廃止になった。私は千住四丁目にあった都電の終点から神田駿河台の学校や都心の会社へ通うのに乗っていたので、当時は都電が廃止になり寂しい思いをした。都バスは常に満員で車掌が「次の車をご利用下さい」と手を出してドアを半開きにしたまま発車して行き、乗り残されることが多かったので私は都電を使っていた。

都電　上野付近　（昭和４２年）
「写真に見る足立の交通誌」石坂満提供

その後、交通量が増加したために日光街道は13路の現のさ加き続く千住橋1978年頃あった欄干に壊されて全く新しく架け替えられた。

⑦〔親柱を橋詰に移築して区の文化財に〕

１９２４年に完成した旧千住新橋は５４年間の役目を終え、取り壊されている写真の中に１本の親柱が立っている。(「足立区５０年の軌跡」より)

今の橋には旧千住新橋の欄干や親柱など昔の面影がなに１つ残されてないのを私は寂しく感じている。

旧千住新橋取り壊し　（昭和５３年頃）
「写真に見る足立の交通誌」石坂満提供

現在、昔の親柱は千住新橋に近い千住大川町の氷川神社の境内と足立区立郷土博物館に残されているが、その頭部と両側に付いていた特徴ある照

氷川神社境内に残されている旧千住新橋親柱と解説板
（2005年）　筆者提供

明器具は、橋の架け替え時に取り壊され今は残っていない。

氷川神社境内の森の中にひっそりとたたずむ親柱を訪れる人は誰も無く、かたわらの解説板に経過が掲示されている。

学びピア前千住新橋
（2005年）　筆者提供

この親柱を子どもたちや後世の人に千住新橋の歴史を知ってもらうために、現在の千住新橋の袂に移設して、改めて創設当時の親柱を復元し、足立区の文化財として末長く親しまれればと願って復元移設を提案する。

場所は学びピア２１前の写真にある橋際が候補に上げられる。

⑧〔発見　親柱が南側と北側で違っていた〕

旧千住新橋の構造などを知る竣工時の資料は、国立公文書館、東京都公文書館、江戸東京博物館、荒川下流河川事務所調査課で調べた結果、残念ながら足立郷土博物館にある「南足立郡誌１５年版」に掲載された１枚の〈開通式の風景〉写真しか残されていない。

しかし今回、１９５６年の歩道拡張工事の前に撮影された写真から照明器具が南側の親柱と北側の親柱で違う取り付けられ方をしているのが発見された。１９２４年の開通式の写真は橋の南側のもので側面の照明器具は親柱の左右に付いているが、今回の写真は遠くに鉄道橋が見えることから北側と確認され、側面の照明が親柱の前後に取り付けられている。

橋に関する資料を調べた結果、親柱の照明器具が南側で違って付いているのは非常に特異なことであった。

左・中：旧千住新橋南側の親柱
「東京府南足立郡誌大正１５年版」 足立区提供
右：旧千住新橋北側の親柱 （昭和２９年） 吉田千伊知提供

⑨〔消滅した照明器具の原型を推察〕

親柱の頭部と両脇の照明器具は詳細が不鮮明である、そこで都内に現存している昔の橋について調べた結果、残っている橋は数が少なかったが、その中に千住新橋とほぼ同じ頃に架けられて照明器具が類似している橋の存在を発見した。

千住新橋より２年前の１９２２年に竣工した日本橋川に架かる「一石橋」は既に架け替えられているが、親柱１本は橋の袂に立ち中央区の文化財として現存している。

一石橋の親柱と解説版 （2005 年） 筆者提供

頭部の丸い石の傘が特徴で千住新橋と類似している。

また両脇の器具は「一石橋」より数年後に竣工した隅田川に架かる「駒形橋」の照明と類似している、しかし駒形橋は

左：駒形橋 右：白髭橋 （2005 年） 筆者提供

器具を支える腕木が１本であるのに対し千住新橋は２本であった。

一方、隅田川に架かる「白鬚橋」は千住新橋より２年後の１９２６年に竣工しており、親柱の頭部と街灯の器具が千住新橋の照明器具をモデルに作られたものと推測される。

以上の３ヵ所の現存物を参考にすれば千住新橋の照明器具は再現出来るものと考える。

（参考資料）
「東京府南足立郡誌大正１５年版」　東京府南足立郡役所　1926年3月31日発行
「露店」　東京都臨時露店対策部編　1952年３月発行
「朝日新聞」　朝日新聞社発行者　1946年8月3日掲載
「写真に刻み込まれた足立区５０年の軌跡」　足立区役所　1982年12月25日発行
「ヤミ市模型の調査と展示」 東京都江戸東京博物館　1994年10月発行

《廃品回収》　　（石坂満）

（お話下さったことを編集委員がまとめました）

昭和の２５年ごろまでは廃品回収の仕方はには２種類あった。1つは家から出る廃品を「くずーい、おはらいものはありませんかー」と声をかけ、代金を払って廃品を集める方法。もう1つは、家の前においてある木の箱でフタのついた「ゴミ箱」に生ゴミや紙くずが捨ててあったが、カゴを背負い、長バサミを手にこの紙くずをつまんで拾い集める方法。どちらも仕切屋と呼ばれる親方がいて、仕事をもらい生活していた。関東大震災（１９２３年）後に、他区から足立区内に移住してきたのが始まり。共同水道、共同トイレの長屋が区内にあったので、木の橋だった西新井橋を荷を載せる大八車がガラガラと音を立てて通っていた。時には子どもも乗せていて、帰りには荷の重しにする。集められた紙くずは再生され、浅草紙（落とし紙・今のトイレットペーパー）など、農家の副業として紙漉をした。本木・梅田方面は農家の副業として紙漉きは盛んだった。また、厚紙に再生されると砂糖袋や草草履の芯、マネキンなどに使われた。

《レンガと運搬》　　（文　則竹秀子）

明治、大正、昭和の初期まで煉瓦は足立区の主要産業であった。明治４年に初めて煉瓦工場を作ったのは下川馬次郎さん。宮城町では馬さんレンガ、馬さん工場といわれ存在は大きかった。

明治１０年、政府により第１回勧業博覧

馬さんレンガ（愛称）

会で褒状（足立区立郷土博物館蔵）が与えられた。

馬さんレンガをきっかけに荒川沿岸に沢山のレンガ工場が出来た。原料の土がレンガに適し、水運を使える便利さによるものであった。このように明治４０年頃までレンガ産業は最盛期を迎えていたが荒川放水路開削により移転、廃業をした工場もあった。後に東京レンガで巨大な会社を作り社宅まで構えて大量の生産をあげていた。このころレンガ工場で働き生計を立てていた人は家族を会わせると４００人を越えていたそうです。

レンガの使われている建物

東京駅は１９１４年開業（「足立の今昔」）旧万世橋は１９１２年の営業（「朝日新聞」）、交通博物館は１９３６年の開館。この３つ建築家が同じ、辰野金吾さん。

横浜レンガ倉庫では下川清さん宅（馬次郎さんの孫）に修理用に倉庫に使われているのと同じレンガを買いたいと最近たずねて来た人がいる。

左上:東京駅
右上：交通博物館
下：旧万世橋
（2006年）　筆者提供

足立区のレンガ作りについてお話を伺いしました

下川敬朗さん：社宅に同級生が数人いて一緒に工場内で遊んだ。多勢の人が沢山働いていて女の人もいた。釜は大きくどのくらいだったか言い表せない。

井上金蔵さん：工場の近くに住んでいた。父親が馬車屋をしていて社宅の子どもたちとはよく遊び場にしていた。工場は広く、トロッコが工場内で動き、窯の中にもありました。工場の敷地内にお稲荷が祀られていました。現在は汚水処理場になったため氷川神社に移されている。

石井　武さん：父親が工場の専属の運搬をしていて工場でよく遊んだ。父ではないが鹿浜方面から土を運ぶのに外車が使われていた。フォード、シボレーのトラック。江北小学校に通っていたので時々乗せてもらう。

下川億一さん：おじいさんが船頭をしていた。このころは運搬が盛んで何人もの船頭がいた。昨年まであった川辺の水神様をずーっと守り管理していました。現在首都高速のため氷川神社に移転しました。

左：馬さん煉瓦工場跡の碑（宮城2丁目下川家前）
中：煉瓦で作られた倉庫（下川家）
右上：下川家の屋敷周りに敷き詰められたレンガ
下：首都高速のため移転した水神様
下川家は最近建て替えられたようですが、屋敷の周りはレンガで敷き詰められています。レンガがお稲荷さんにも祀られていました。下川さんの子どもの頃は、レンガを焼いた窯が庭先にあり、よく上に乗って遊んだそうです。
2005年　筆者提供

私が宮城に引っ越して来たのは、昭和４５年７月（１９７０年）でした。道路の反対側には、１００m位の長い塀に囲まれた工場があり、その社宅として使われていた家も、くずれた所もあったがレンガの塀でした。現在工場のあと地は、ふれあい公園になっています。また町の中を歩きますと路地やアパートの片隅などにレンガがなにげなくころがっていたり、積み重ねてあるので、どうしてかと思い続けてました。

レンガの塀の前で記念撮影
（現在の宮城ファミリー公園）
（昭和55年頃）　筆者提供

が、疑問がとけました。荒川をはさんで、この周りにはレンガの工場がたくさんあったとのこと。名残りがあったのです。現在昔のレンガの建物が徐々にこわされているが東京駅の駅舎に使用されたレンガは当時ここでつくられたもの。東京のシンボルとして、ずっと人々を見守ってほしいです。

宮城町一丁目阿出川八郎さん宅の蔵　大正１０年建築。大正１２年９月１日の関東大震災・東京大空襲にも逢うが無事。　（2005 年）　筆者提供

小菅レンガ　最初は民間の工場だったが、 のちに官営になり、 銀座レンガ街に使用された。
写真は北千住駅開業記念に配られた小菅煉瓦。 箱に印刷された写真は会員の石坂さん撮影のもの。

（参考資料）
「足立の今昔」 足立区役所編、 発行　1979年３月１日
「朝日新聞」　朝日新聞社
（聞き取りにご協力いただきました）　（五十音順）
阿出川八郎さん、 下川億一さん、 下川敬朗さん、 井上金蔵さん、 石井武さん

《レンガとは》　　（遠藤浩）

レンガの原料は酸化鉄を適度に含有した粘土であるが、その粘土に川砂を混合し、所定の寸法に成型して乾燥したものを登窯またはトンネル窯で１０００度に焼成して製造する。製品に赤褐色を帯びるのは酸化鉄のためである。また、製法はそれほど高度の技術を要するものではなく、誰でも６ヶ月くらいで一応の技術を身につけることが出来たという。

町屋の信号表示に残る「荒木田」の地名　（2007年2月21日）荒川ビジターセンター撮影

元来、レンガの製造は天候に左右されることが多く、年間を通じて５月から１１月が一番生産のあがる時期といわれていた。製造工程中は、自然乾燥を待たなければならない時間が多いので、曇天や雨天のつづく時期には生産が低下したものである。

焼きあがったレンガには、表面のザラザラしたものと、うわぐすりを塗ってツルツルした上等のものとがあり、上等のレンガは「鼻黒」とか「横黒」と呼ばれた。

東京駅の丸の内側の赤レンガ屋舎は１９１４年（大正３年）の秋に完成し、１２月１８日から営業を開始したが、このレンガは宮城で作られたものがたくさん使われた。

明治以降隆盛をきわめたレンガ産業も終焉を迎える時がくる。１９２３年（大正１２年）９月１日の関東大震災である。レンガの造りの工作物は、箱形に造るとかなり強固であるが、塀のようなものは地震にあうとひとたまりがないことが判明した。これを境に需要はぴたりと止まり、衰退の方向にむかう。

荒木田土を使用してレンガを製造したのである。その荒木田とは、昔の三河島村の字の名で、現在の荒川区町屋８丁目の隅田川の岸辺の地域である。今も尾竹橋通りの交差点と交番にその名が残っている。この地の土は商品として取り引きされた。もともとは荒木田周辺の土が使われたのだが、採取範囲が隅田川沿岸の各地に広がり、やがて利根川流域の地域でとれる様な土も荒木田の名で呼ばれるようになった。現在では造園などの業界で使われている。

（参考資料）
「足立の今昔」 足立区役所編、 発行　1979年３月１日
「わが町の昔を語る　足立区の宮城と小台」 高梨輝憲著　高梨輝憲出版
「都市に自然を回復するには」 野村圭佑著　どうぶつ社　2004年６月

《こうもり（蝙蝠）》　　（文と絵　鈴木芳夫）

私が小学生（昭和１０年ごろ）のときの一番の遊び場所は、荒川（当時は放水路）の河原だった。河原といっても放水路を掘って１０年ぐらいのころだから、もともとの畑のかたちが残っていて蓮華や菜の花が一面に咲いたところもあり、遊び放題だった。

遊び疲れて夕方、夕焼け空のなか土手に登ると、まず校歌にある「宮居に近きわが里は東に筑波、西に富士」を確かめるように夕日に染まる富士山、そして振り返って筑波山をながめるのが例だった。当時は、土手より高いのは鉄塔だけで、遠くの山々が見渡せた。

夕方の土手といえば、蝙蝠の乱舞が忘れられない。こうもりは、夕方から日没までが活発に活動するときのようで、餌の昆虫を採っていたようだ。土手すれすれに飛ぶのもいたが、捕虫あみではすばやくて、とても捕まらない。イエコウモリ（アブラコウモリの別称）という種類で、日本家屋の天井裏か、壁の羽目板と土壁のあいだのすき間に棲んでいる。

私の家の物置にしていた古家屋にも、多数住み着いていて、夕方になると軒下からつぎつぎととび立っていく。好奇心から羽目板をはずして捕まえてみたら、子どもの手の内に入るぐらいの大きさで、翅を伸ばしても１０センチあまり、こねずみに翅が生えたような印象だった。

昨今は家の建て方も変わり、こうもりの棲みかもなくなり、餌の昆虫もすくなくなったからか、こうもりの飛ぶのをみなくなった。

《荒川の空》　　（文　吉田千伊知）

安政５年頃に刊行された歌川広重の「名所江戸百景」の”箕輪・金杉・三河島”の絵を見ると２羽の丹頂鶴がのどかにしている。それくらい江戸時代は将軍が鷹狩りをするために鳥は保護されていた。

箕輪町史に江戸時代に佐藤基という土地所有者が渡り鶴を呼ぶために四郎兵衛という者に餌をまかせ、竹矢来をつくらせて人通りをとどめて楽しんだものだったが、これが名物になり、鶯、雲雀と共に根岸の三名鳥とされた。

享保９年、８代将軍吉宗がこれを見物に訪れてから、鶴の餌付け場として幕府の援助をうけることになった。（その後鶴お成りと称して将軍家斉が８回、家慶が２回”お成”があったと記録されている。）

現在の東京拘置所付近に小菅御殿があり、吉宗や家重は鷹狩りの際

にたびたび訪れた。従っていまの足立区の辺りも鳥見屋敷がある程鳥は大事にされていたので、いろいろな種類の鳥がたくさんいたのだが、明治政府になると明治６年に鳥の保護令が解かれ、鳥は捕り放題に捕られ激減してしまった。

明治２５年に全国一律の禁猟鳥の設定まで、学者には「鳥獣保護の暗黒時代」といわれた。新政府は取り返しのつかない失敗をしたものである。

江戸、明治の花鳥画の手本を見ると相当の珍しい鳥がいた。森鴎外の「雁」という小説では不忍の池で雁を見ている。

荒川（放水路）の空ではピーヒョロヒョロと鳴く”とんび”がゆっくりと輪をかいてグライダーのように羽を動かさず飛んでいるのを珍しくなく何羽も見かけたものである。それほど餌になる生き物が豊富にいたのである。モズ、ヒバリ、今いる鳥はもちろん、見られなくなった鳥もいたに違いないが、その頃あまり関心がなかったので、ヨシキリ、あまり名をあげられないが夕暮れになるといっせいに黒いコウモリがたくさん飛んでくる。街灯に蚊柱ができるほど蚊は多かった。暗くなると荒川では夏はゆらゆらとホタルが飛んでくる。子どもは「ホッホー、ホタル来い。こっちの水は甘いぞ、ホッホーホタルこい、あっちの水は苦いぞ」と歌いながらホタルを追ったものである。非常にきれいな、今思うとぜいたくな夢のような光景だった。

（参考資料）
「野鳥と共に８０年　聞いたり見たり験したり」　松山資郎著　文一総合出版　1997年９月25日発行

《天然プール（水練場）》　　**（文　鈴木芳夫）**

昭和１０年ごろのはなし。荒川（当時は放水路という。）の河川敷には幅１００メートルもある大きな池が各所にあった。昭和以前にレンガ製造原料用の粘土を採ったあとか、放水路の堤防用の土を取った跡か、はっきりしない。

千住新橋の千住側には修武館とか、講武館とか、厳しい名の古式泳法を教える水練場があった。私の通ったのは西新井橋のすぐ上流、千住側

(右岸) にあった天然プールと呼ばれていた池は、川と通じていて、干満に応じ水位が変わった。

夏休みの間だけ水練場が開かれたが、脱衣場はスノコ張りの床の周囲をよしずで囲っただけのもの。

水府流水練場の看板だけが立派で、この水練場の経営者が私の家のそばの肉屋の主人で、赤ふんどしに白の綴れ羽織だけの姿で師範席にすましているのがおかしかった。泳げない初心者は、赤帽で数本の赤旗で示された安全地域で、固定された丸太につかまってバタ足のけいこ。犬掻きからはじまって、泳ぎに自信がつくと、放水路の横断へと冒険に乗り出したものだ。

《赤水門》　　（吉田昭三）

（お話下さったことを編集委員がまとめました）

旧岩淵水門（赤水門）

私は若い頃、荒川治水上流事務所、当時、南古谷（今の川越）に職を得、しばらくおりました。のちに岩淵水門に異動し、水量の測定に当たりました。川にワイヤーを張り、１０メートルごとに鉄の水車みたいな物をつけ、その回り方で水量と水流を測る。また、自転車で土手の見回りをする。いたずらに穴を掘っていないか、きずをつけていないかと監視する。当時赤水門は現役だった。今は青水門です。北区の勤務だったので、北区側の土手下を耕作しようと言うことで掘ったら、川原から古い土器のかけらが見つかり驚いた。学校の先生が来て、学者までやってきて大騒ぎだった。いまでも北区の郷土資料館に展示されています。

荒川の昔を
伝える会
仲間に入りませんか？

荒川のうつりかわり　1

←《荒川の風景》
地下水のくみ上げにより地盤沈下が進み、河川敷が水びたしになってしまった。千住新橋右岸よりから西新井方面をのぞむ。

吉田千伊知提供

《新旧千住新橋》→
新しい千住新橋の上り方面の工事が始まっている。左側の橋は旧千住新橋、新旧の橋の高低差がよく分かる。

吉田千伊知提供

↑《首都高建設のうつりかわり》
千住新橋北側足立1丁目から小菅方面を見る。左の写真では右側が千住新橋から下りる坂道、中央の用水のある所が、右の写真では高速道路の右の橋脚あたりになっている。左側の空き地は高速道路のために移転されできた。右の写真は立ちのきが完了し、橋脚の工事が大分すすんだ状態。

吉田千伊知提供

地元の方々にお話をお伺いしました＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

荒川近くに長く住んでいらっしゃる方々にお話をお伺いすることができました。私たちの知らない、何代も住んでらっしゃる方々だからこそ、伝えられている貴重なお話がたくさんありました。

お話を伺う時には、問いかける役、お話をメモする役というように役割分担をしました。たくさんのお話にメモがおいつかないこともあるので、テープレコーダーでお話を録音させていただくこともありました。

お訪ねしてみると、屋敷の古さに驚いたり、水害用の舟が保存されていることに川と昔の方々との付き合い方を考えさせられたり、驚きと発見の連続でした。お忙しい中、たくさんのお話を聞かせてくださったご協力者の方々に感謝いたします。

快くご協力くださったみなさま
本当にありがとうございます。
（お伺いした順）

田ヶ谷正久さん	田中善一郎さん
川名安之介さん	横山　佐吉さん
川澄　　巌さん	柳川　峰造さん
阿出川信夫さん	増田紀二六さん
新井　正一さん	清水　義允さん

この項目の見方

・お伺いしたお話を編集委員会で書き起こしました。

・「質問」と「答え」は、読んでいただく方にとってわかりやすくなればと考え、お伺いしたお話をもとに会員同士で疑問を出して話し合いをしたものです。ご本人がお答え下さったものは、質問の前にその旨記しました。

《田ヶ谷正久さん》

伺った日：平成１７年６月２８日

お住まい：扇１丁目（旧・本木町四丁目）

訪問した田ヶ谷さんのお宅には、古い蔵がありました。蔵の軒下には木造の舟が保存されています。これは荒川の水害に備えた避難用の舟だそうで、荒川を渡るときの渡し船としても使用したとのお話でした。

本木でのセリ栽培
（昭和47～48年頃撮影）　石坂満提供

この辺りは荒川の水利を活かし、昔は沢山の稲作水田やセリ田がありました。セリ栽培は、ここ本木地区が発祥の地とされています。セリ栽培の発祥を示す銅板の史碑が、扇一丁目御嶽神社境内に建てられています。

田ヶ谷さん宅に、もう一つ珍しい物がありました。荒川の土手で滑って遊ぶ、木で作ったソリです。昔は土手の草が枯れるころ、子ども達が木ソリを持ってきて、大勢でソリ遊びを楽しんでいたそうです。

蔵と舟と木ソリを、写真で紹介しておきましょう。

田ケ谷家の蔵（左）・蔵に保存されている舟（中）・土手滑りで遊ぶ木ソリ（右）
（平成17年6月27日　田ケ谷さん宅にて撮影）

会員の質問に、田ケ谷さんご本人が答えて下さいました。

質問：蔵はいつごろ建てられたのですか。

答え：今から約１１０年前の明治２７年です。最近になって、柱の土台と屋根の瓦を全面的に修繕しました。土台は大水の被害を避けるために、盛り土をしてあります。昔は蔵のある家が荒川に沿って沢山ありましたが、今ではこの建築様式の蔵は、数軒しか残っていません。

質問：水害で舟を使ったことは有りますか。

答え：この半世紀の間では、舟は一度も使っていません。狩野川台風のとき本木地区では沢山の家が浸水の被害を受けましたが、我が家は土

台が高かったので、浸水には遭いませんでした。

質問：この木ソリは誰が作ったのですか。

答え：私が小学生のときに、自分で作りました。昔は自分で遊ぶ物は自分で作るのが当たり前だったのです。昔の土手は、今の高さの半分くらいでした。その頃は、とても高い所から滑り降りたような気がします。今ではこのソリを使うこともありませんが、捨てるには勿体ないので残してあります。物は大切にしたいですね。

《川名安之介さん　川名商店》

伺った日：平成１７年６月２８日

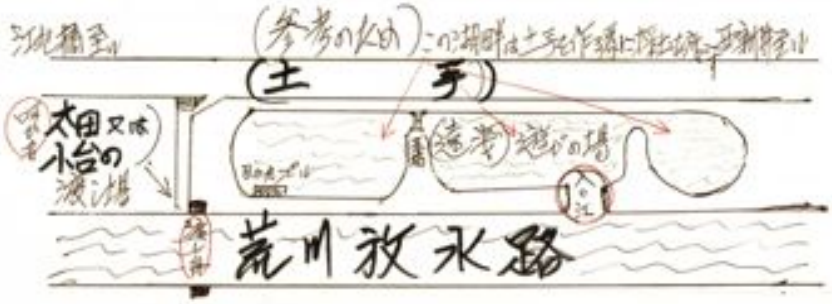
お住まい：扇１丁目

江北橋下流右岸
（昭和４６年）石坂満提供

当主川名安之介さんは１９３１年(昭和６年)生まれ。昔は農家であったが、今では最中(もなか)の皮作りをしています。都電最中や有名店のものも焼いています。

子どもの頃の思い出は砂をだんご状にして上から落として遊んだり、魚とりはビク・四つ手網・玉網(たまあみ)・手ぬぐい等も使いました。魚取りには、四ツ手網や玉網を使いまして、取れる魚の種類は数多くおりました。例えば、ボラ、セイゴ、コイ、フナ、ウナギ。口先の長いサヨリ、エビ、ハゼなどおりまして、特にハゼなどは、干潮の時に遠浅と言う場所がありまして、足跡（くぼみ）になっている所を手探りで捕まえて、魚籠(かご)の代わりに手拭(てぬぐい)を袋(ふくろ)にしたものを、３cm位の太さの竹を長さ５cm程度(ていど)に切り、袋の口に結びつけ、ひもで首に掛(か)け、捕(つか)まえたハゼを入れる。数時間の内に５cmから１０cm前後のハゼが一杯(いっぱい)になることがあります。

私達(わたしたち)にとっては荒川放水路は遊び場でもあり、思い出の場所でもあります。



現在の扇大橋の辺り（川名さんの家のお近く）の昔の様子。

荒川放水路にはホタルが棲息していたし、列車が荒川の鉄橋を渡ると音が聞こえた。最近ではトンボの数が少なくなった様である。不思議な現象です。

質問: 荒川放水路に生息していたホタルはいつ頃までいたのですか。
答え: ホタルは河川敷にいました。戦前でもそんなに見かけませんでした。いついなくなったかは分かりませんが、いたのは確かです。食糧難で気にもしていられなかった。戦後は見ていません。

《川澄巌さん》

伺った日： 平成１７年6月 ２８日
お住まい：扇１丁目

バス会社・宝華園自動車部（西新井町）
（昭和7年）足立区役所

当主である川澄さんは打刃物の職人さんで、東京都の伝統工芸士の認定をうけておられる方です。川澄さんが作る鋏・国治は、植木や花鋏の世界では最高ランクと言われています。

川澄さんは昭和７年生まれ。幼少の頃、荒川の土手は内務省の管轄で、土手で遊ぶことは草が傷むと厳しかったので、土手下の田んぼの方で遊んだそうです。また、鳩ヶ谷から千住大橋まで青バスが走っていて、1時間に１本の運行で、途中でも手を挙げるとバスが止まりました。

粘土質である荒木田の土が多く採れることからもレンガ工場が多かった。荒川遊園地も昔はレンガ工場でした。

荒川放水路のできる前に粘土を取ったと思われ、日の丸プールは粘土を取った後と思われます。

質問: 内務省とはどんなところですか。
答え: 今の総務省。当時の内務省は総務省より権限が大きかった。
質問: 荒木田土とはなんですか。
答え: 尾竹橋を渡ってすこし行ったところにある交差点が「荒木田」という場所です。町屋に向かって右折したところです。隅田川の両岸は粘土質の土で、“土間を荒木田土で固めた”と表現されました。

《阿出川信夫さん》

伺った日：平成１７年７月２日

お住まい：扇２丁目

昭和１４年生まれ。寺地小学校１１期卒業。

明治２年、築１４０年のご自宅は長屋門と呼ばれていて、信夫さんは１５代目当主。

小田原の北条家の末裔、荒川放水路の開削で土地を手放すことになり、代替地として選んで当地に。大正大震災にあったり、大正２年生まれのお父さんが戦争でシベリアに行き、作業中に怪我をされ、大変苦労された。

葛西用水で泥落とし
（昭和３６年）石坂満提供

つまもの、枝豆、こまつな、ほじそ、セリ、山東菜等の作物を手がけていたが、荒川での思い出は太田の渡しの乗り場のコンクリート台があって、鮮菜ものの泥おとしに、荷車につんで川に洗いに行った。翌朝には西新井橋を回って千住のやっちゃばや築地までオート３輪で出荷する。今は枝豆が忙しく、足立区入谷と築地まで出荷している。

約３０年位前、田んぼを扇小学校に差し上げて（３軒で）、２０年位前に高速道路の立ち退きで家を残すため、尾久のヒキロクさんに頼ん

高速道路工事のため阿出川家の母屋が移される様子。ヒキロクさんの仕事の様子。
阿出川信夫さん提供

で長屋門と母屋を引いて、移した。辰巳（南東）向きの門と、母屋は９０度向きが変わってしまった。母屋は玉石２つを重ねた上に柱が立っている建物で、屋根瓦だけ残して、移動、壁や玄関は新しくした。

家には御先祖の彫ったケヤキの不動像が奉られ、母屋の横にはお稲荷さん、代々つづいてきた時間を感じました。

阿出川家の長屋門（2005年7月2日）

質問:「太田の渡し」とはなんですか。

答え：今の扇大橋からすこし下流に入ったところ。西新井橋と江北橋の中間にあった渡し場です。

質問:「ヒキロクさん」とはどんな方のことですか。

答え:「ヒキロクさん」と呼ばれた初代が佐藤又八さんというお名前でした。道路の拡張や区画整理で家の移転がたくさんあり、活躍されました。曳屋の又六さん、すなわち、「曳六さん」と呼ばれました。

質問: 高速道路のために移築して、生活に変化はありましたか。

答え: 大いにありました。日があたらなくなった。騒音や振動もすごい。窓があけられないため空調代がかかるなど、お金がかかります。

《新井正一さん》

伺った日：平成１７年７月２日

お住まい：皿沼２丁目

大正11年生まれ　江北村大字加々皿沼　江北小学校卒業。

小学校は分校３つ（新田、宮城、皿沼）で５年生から本校へ。５年は男女４７人、６年は男子６３人の組だった。主席にて卒業、越谷の農学校へ。区長推薦で憲兵隊に入隊。

江北橋
（平成3年）石坂満提供

父の時代、荒川放水路の工事を見ており、話は少し聞いていたが、覚えていない。すべての工事は人力で、トロッコが主力だったということぐらい。

４０年ほど前から区画整理組合で尽力、２４年間の大事業だった。

又、皿沼小に土地を差し上げたりした。人の土地も入っているので、本当にうまくまとまるか心配だった。

放射１１号線建設工事で地中から見つかった貝殻

父の話では、水争いの話もあった。見沼の水打ち(水とり戦争)といって、天領持ちまたは寛永寺持ち（侍）と神領持ち（神社）など持分のようになっていて、水の使い方もいろいろあった。

昭和５０年放射１１号線を作る時、１０ｍも下あたりから、貝殻が出てきて、驚いた。

とってあった貝を見せていただき、大きさと全然壊れていない形に会員も驚きました。

質問：憲兵隊とはなんですか。
答え：軍隊の警察のこと。
質問：区画整理組合とはなんですか。
答え：土地と道路を整理するための地主さんの組合。
質問：水争いとはなんですか。
答え：田んぼへ引く水の取り合いのことです。

《田中善一郎さん》

(代理で友人の三木さんがお話下さいました)
伺った日：平成１７年８月１４日
お住まい：扇２丁目

現在の都営本木本町第３アパート（尾久橋通り建設地）　（昭和４５年）　石坂満提供

扇２丁目在住の田中さんのおじいさん（祖父）は昭和の初めの頃に”太田の渡し”の船頭さん。扇町の鮮菜ものや花、葉物を荒川区方面に売り歩く人たちが、リヤカーに野菜を乗せ出荷する。そのリヤカーを船に乗せて荒川を渡した。朝は３時頃から夜明けと同じ様に働き出す。

善一郎さんは５才位から地下足袋姿でおじいちゃんの手伝いをした。お正月にはおじいちゃんから手伝いのおこづかいがもらえた。荒川も生きる糧だった。

荒川近くに住んで、先祖代々この土地に住めることをありがたく思い

ます。子どもの頃の遊びの楽しさや苦労の多かったことも、今となると心の糧として思い出し、変わってきた川を見ている今日この頃です。

当時近くに牧場が１０ヶ所位あった。土手の草も良いエサだったけれど、戦時中には、早稲田、代々木あたりから、馬料商（軍隊の馬の為）が移ってきて、軍馬のものとして使えなくなった。西新井橋の下に蹄鉄屋もあった。

質問: 蹄鉄屋は何をするところですか。
答え: 荷物を運ぶ馬などのひづめに蹄鉄を打ち付ける職業のこと。舗装道路だと滑りやすいので、昔は馬も牛も、すべらないようにわらじを履かせたりしていました。
質問: 昭和の初め頃の牧場で飼っていたのはなんですか。
答え：牛だけ。乳をとって街の牛乳屋さんに売っていた。馬は爪の構造が違うので、土手を傷つけてしまうので飼ってはいなかった。
質問：牧場はいつ頃なくなり、その後何ができたのですか。
答え: 牧場がなくなってきたのは、家が増えてきたことなどが大きな理由。跡地は宅地や工場になった。

《横山佐吉さん》

伺った日：平成１７年１０月５日
お住まい：千住４丁目

大正１２年６月生まれ〔関東大震災の年〕

南足立郡千住町時代の千住町長だった父、横山佐助の４番目にして初めての男の子で跡取りとして大切に育てられた。

横山家　右に写る柱には彰義隊がつけた刀傷が残る。
（昭和40年頃）吉田千伊知提供

生まれて７０日目で関東大震災にあい、１週間外で過ごしました。家は柱が残ったが壁が崩れ、砂煙がとてもひどくずい分泣いたと母から聞かされた。後で砂煙のあるところでは子どもは顔を横に向けて抱くといいといわれました。

今日は放水路の話ということでしたが、私は荒川と言わないですぐ放水路となってしまいます。家から土手に上がっても、４号線と東武線の先は何もなかったんです。現在の４号線（日光街道）は戦闘機の不時着用の土地といわれました。現在の松原団地近くに種屋さんがぽつんと１軒あっただけで、昭和１６年頃まで一帯は田園だけです。

千住新橋のところの水練場に入っていました。昭和１１年、中学校に入学しましたが、国民皆泳が始まっていて、みな泳げなくてはいけないと言うことで、中学1年当時、夏の合宿で和船から海に突き落とされて強制的に覚えさせられることになるのですが、水練場で泳げるようになっていたので、自分はされずにすみました。

千住新橋そばの水練場　七代目横山佐吉さんが５歳の頃。袴姿のお父様・六代目佐助さんが右横にいらっしゃる。
（昭和３年頃）横山佐吉さん提供

低学年の頃、土手はもっと低かった。ワンドという川につながった池があちらこちらにあった。1時間か２時間でバケツ一杯のシジミがとれました。ツクシもにょきにょきとあった。摘んでできては、ハカマをとってご飯に炊き込んでくれるんですが、１つでも苦味のあるものが入ると全部のご飯が苦くなるので、これはまずかった。

当時、家には女中さんが２人、書生さんが１人いまして、大所帯でした。かまどでの炊事（すいじ）に女中さん１人は、１日中勝手で立ち働いていました。

横山の初代は呉服屋で、後に紙問屋になり、今は七代目になります。蔵が４つあって、そのうちの１つが紙蔵でした。その蔵の中で鬼ごっこをして、番頭さんに再三叱られました。紙の端が欠けたりすると、売り物にならなかったからです。商（あきな）いは浅草紙（落とし紙、今のトイレットペーパー）ですが、種類はＡ・Ｂ・Ｃがある。家庭用には上等のものを・働いている人はゴワゴワの紙で、使う種類が違いました。

昭和３年頃、千住大橋は鉄橋でした。千住新橋も鉄橋だったと思います。体が丈夫でなかったため戦中戦後の５年間ぐらい、保木間の軍需工場で働いていました。昭和２２年まで、保木間へ働きに行くのに、晴れの日は自転車で千住新橋の坂道を登りました。その頃は木炭自動車が千住新橋の坂道を登れない。木炭自動車はまきを積んで、１０人位の人を乗せて走るんですが、その１０人が降りてきて押し上げたりしていた。

〔話をお聞きした当日、会員からの質問に答えて頂きました。〕

横山家　彰義隊がつけた刀傷が残る柱は塀ができて隠れた。
（昭和４５年）石坂満提供

○荒川を作るために右に左に移動した家は６００軒あったと聞いている。右側左側とは、千住側・梅田側です。自分の記憶では大正いっぱい工事をしていたように感じた。トロッコは家でも紙を運ぶのに使っていたので、身近にありました。

○関東大震災（大正１２年）のとき火事にならなかったので、壁は壊れたが家は残りました。

○落とし紙は再生紙で、漉いた紙は板を使って干した。その紙漉きの板で、家の塀を作りました。

○家の蔵の中には浅草紙が７割で、上野・浅草の小売屋さんまで大八車に積んで運んでいた。

○旧日光街道は牛や馬の道だったので、大八車や牛車がヤッチャ場まで荷物を運ぶのに、朝方の３時頃からガラガラ音を立ててうるさかった。旧道はかまぼこ型の５間道路でラッシュになるとつながって渡れなかった。

○もう帳場はありません。大福帳は戦時中、和紙が全然なくなった時、5丁目の名倉医院さんに運んで使ってしまいました。父の一番上の姉が、名倉さんに嫁に行っていて、親戚になるんです。畳の診療所で、お酒に酢・黒い薬でとても匂いが強く、それを和紙につけて手当てするのですが、字が書いてある紙でもよいそうで、そんなわけで全部出してしまいました。少しぐらいとっておけばよかったと今では思います。

○四つの蔵は内蔵（これは畳の処からすぐ入れる蔵）と、下駄を履いてゆく外蔵とあったんですが、壁は落ちる、床はとれるのでつぶそうかと

思っていたんです。区役所に聞いたら欲しいというので、解体費用は家で出し、移動と再建築費用は区が出し、新しい白壁のギャラリーになりました。天保元年（１８３０）の蔵でして１７５年前の蔵です。

○タコアゲやメンコ・ケンダマでよく遊んだ。ヤッコダコ・トンビダコ・四角の凧などは自分では揚げられず、凧揚げの好きな爺やさんにあげてもらいました。

○家の厠（かわや）（トイレ）は農家の人が汲み取りに来てくれて、代わりに野菜を置いていった。

○旧道には用水はなかった。千寿本町小学校や長円寺あたりは半分が道と用水になっていた。私が見たときはドブ水だった。旧道からは用水の方へ流れるようになっていた。イトーヨーカ堂あたりから駅の１階は見えない。旧道が一番高くて、駅の方へ下がっていくようになっていた。

〔会員で疑問を話し合いました〕

質問：国民皆泳（かいえい）とはなんですか。

答え：軍人になるための訓練。太平洋戦争中に、泳げないと軍隊に入れないので、国民がみな泳げるように訓練しました。

質問：落とし紙とはなんですか。

答え：落し紙とは今のトイレットペーパーです。農業の合間に本木、梅田地区で多く作られていた。古紙を大釜で煮てドロドロにし、ホテイアオイ（水草）の根の汁とまぜて、箕桁（すげた）という道具ですくい上げ、板に張りつけ乾燥して出来上がる。平らの紙ではなく、細く波打っています。白いのと少し色の付いた2 種類のあり、白い方はやわらかく、色付きの方は、ごわごわしています。今でも売っている店があります。昔はこの落し紙を使うのはぜいたくで、普通の家では新聞紙を使うのがあたりまえのことでした。

質問：水練場があったのは水がきれいだったからですか。でもいつ頃まで川で泳げたのですか。

答え：千住新橋そばの水練場は昭和２５、２６年頃までありました。昭和２７年に千寿第五小学校にプールが初めてできた。その後次々にプールができたたため、水練場がなくなりました。荒川はまだ綺麗でしたが、子どもがお腹を空かせていて泳ぐ余裕はありませんでした。お米が食べられなかった頃にはアサザ（水草）も食べました。

《柳川峰造さん（85才）、
　増田紀二六さん（65才） 増田燃料店》
伺った日：平成１７年１０月１７日
お住まい：足立区足立２丁目

柳川さんの自家は綾瀬川改修工事があった江戸時代から名家であった。父親は宮大工（みやだいく）で西綾瀬、長性寺を大正時代に建立する。

１９００年（明治３３年）創立の弘道小学校は綾瀬駅と大室質店の間にあった。下山事件の話も出る。

昔、足立２丁目は畑が多く、小松菜、カブ、ねぎ等を作っていて大八車（だいはちぐるま）で千住新橋を渡り、ヤッチャバ（野菜市場）へ運ぶ。農家では朝鮮牛を飼っており、牛車・農耕用として使う。人糞（じんぷん）を売る商家もあり、隅田川沿岸の農家へ売った。肥やし屋さんと呼んでいた。船を利用する商売が繁盛していた。

綾瀬川　伊藤谷橋　綾瀬駅方面を望む
（昭和30年代）吉田千伊知提供

綾瀬川　下流より伊藤谷橋を見る　鉄橋は国鉄常磐線　右が綾瀬方面
（昭和30年代）吉田千伊知提供

東武線を造る土盛のために土が必要であり、町には土を掘ったことで池が点在していたが、千代田線が開通する事により、地下部分を掘る時に出た土で池が埋め立てられる。埋め立てる土地の持ち主は、お金を得る事ができた。

高速道路の下は川が流れていた。

昭和初期、綾瀬川で泳いだ。当時、土手は現在の３分の１位の高さで、低かった。

質問：船を使う商売とはどんなものですか。

答え：今の運送業のようにいろいろなものを運ぶのに船が使われました。野菜やレンガやおわいを運んでいました。尾竹橋近くには戦前に魚河岸があったので、魚河岸への魚は船で運んでいました。お化け煙突の燃料の石炭も運んでいました。

《清水義允さん》

伺った日：平成１７年１０月

お住まい：宮城１町目

則竹秀子提供

土手の想い出を清水義允さんに語っていただきました。

１９３８年（昭和１３年）生まれ、宮城小学校第１２代ＰＴＡ会長をされたり、長いこと地域の青少年育成に尽力されました。最近まで「かどや」という酒屋を営んでいました。

荒川土手の想い出は沢山あり楽しく遊んだのはあたりまえのことですが、こわい体験がある。空襲で橋の下ににげこんだこと。昭和２０年２月小学校へ入るため、母につれられ江北小学校へ身体検査に行きました。帰り道のことです。二人で江北橋のところに来た時でした。大きな飛行機が何機も私達をおそうかのように飛んできました。私と母は土手をかけおり橋の下ににげ込みました。生きたここちがしなかったというのは、あのようなことなんですねと話してました。東京では学童疎開や縁故疎開（親戚や身内をたよってうつり住む）が行われました。清水さんも、その後埼玉にあずけられました。宮城小学校は大正１２年７月に江北小学校の分校として設置されたため入学手続きは本校で行いました。

コラム　　第一集「荒川の昔　遊び」はこうして作りました

2004年2月8日
荒川の昔を伝える会発足
足立の荒川を知りたい、伝えたい人集合！

●郷土写真家でもある石坂さんが50年撮り続けた荒川のスライドショーとお話し

●自己紹介と思い出の交換会。小昔の渡しに乗ったことなど、話に花が咲く。

3月
荒川の昔の記憶を整理

●伝えたいこと、知りたいことはなんですか？
→伝えたいことが一番多く挙がった
「遊び」を最初のテーマに決定！

3月～4月
遊びの記憶を整理

●昭和初期、20年代、30年代のグループに分かれて記憶を整理していきます。

遊びを年表で整理

●遊びの名前、場所、方法はどのようなものだったかをグループ毎に整理
→記憶の裏づけに必要な項目を挙げる。
・ボートはいくらで乗れたの？
・草花遊びをした植物の名前は何？

5～8月
記憶を裏づけする

●調べたものをつけ合わせて事実確認
記憶を裏づけして、各年代の遊び毎にまとめる

調べましょう！

ーこうやって調べましたー
・こんな風に
「千住新橋近くにあったボート屋の名前は？」
「当時の写真を見てみましょう」ルーペで見ると･･･「田川屋だ！船の旗に書いてある」
・他には･･･聞き込み、資料を読む、荒川知水資料館に聞く　など

●記憶と調べたことをまとめて意見交換
「水練場に浮かべた伝馬船の動力は何ですか」と昭和初期チームに質問。「長い竿を持って、川底にさして船を歩いて進めたんだよ」と、身振り手振りで回答。
質問や意見が調べる材料になり、内容が充実しました！

質問は来ているかな？

お答えします！

●編集委員決まる！
編集方針や本の構成を決めます。みんなの意見を反映させる大役。

9月～11月
原稿作成

●原稿作りの視点
裏づけした記憶を文章に。
当時感じたことや使っていた言葉も大切に。

●原稿へ意見を交換
「トーセイトンボって？」読み手の視点で知りたいことを書く。質問の答えを原稿に入れて、内容を豊かにしました。

11月～2月
班に分かれて本の仕上げ

●編集委員は校正　文体を統一させたり、4年生以上が読みやすいようにルビ振りなど、この本での校正基準を決めて作業をしました。

●表紙作成、写真ページ作成、資料作成、パソコン入力、イラスト描き。それぞれの得意なこと、興味があることが生かされて作業は進む。

「この写真がいいじゃない」

「ここ直してください」
修正意見は編集委員が対応

●今までの作業が1冊の仮の本にまとまる！
みんなで内容を読んで意見交換。読んでくれる人の視点にたった意見や見やすくする工夫の意見もでました。

2005年3月
「荒川の昔ー遊びー」完成！

荒川のうつりかわり　２　―橋の風景

《千住新橋》

（旧）千住新橋

１９６０年（昭和３５年）頃。
交通量が増えたため、橋の拡幅工事（橋の幅を広げる工事）が始まった。
１９２４年完成。

写真：石坂満提供

（新）千住新橋

１９７３年（昭和４８年）着工。上り線が荒川の下流側に設置されている。
１９７８年完成。

写真：2000年頃　荒川ビジターセンター撮影

《西新井橋》

（旧）西新井橋

１９６１年（昭和３６年）頃。
西新井大師へ行く大師道に続いていた。
１９２２年完成。

写真：石坂満提供

（新）西新井橋

旧橋の約１００ｍ下流に造られている。墨堤通りに続いている。
１９６１年完成。

写真：2000年頃　荒川ビジターセンター撮影

《江北橋》

（旧）江北橋

木造で、鳩ヶ谷街道につながる。「阿弥陀の渡し」に平行に造られていた。橋の向こうに見えるのが新江北橋。

１９２５年完成。

写真：石坂満提供

（新）江北橋

１９６６年6月２１日完成。

写真：2000年頃　荒川ビジターセンター撮影

《扇大橋》

扇大橋

「太田の渡し」に平行して造られた。日暮里に続いている。

１９７９年完成。

写真：2000年頃　荒川ビジターセンター撮影

扇大橋

「日暮里・舎人ライナー」が上を通っている。高速道路がその下を走り、扇大橋は一番下に通っている。

写真：２００６年　則竹秀子提供

みんなの思い出2 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

《千住新橋の交番》（文　吉田千伊知）

今の千住新橋には交番がないけれども昔の橋には交番があった。戦前、千住側から渡り切った所の右側（下流）にこじんまりした派出所があった。昔の街道の関所の様に。

左の建物は千住新橋派出所　手前の道路は旧千住新橋の終わりの所
（昭和50年）筆者提供

千住側に都電の終点（千住四丁目）のそばに千住五丁目の交番があったから、北側にあったのだと思われる。戦時中食糧が配給制度により、自由米などが欲しいだけ買えなくなった。だから埼玉県の農家から分けて貰い自転車に積んで交番を通る時は恐かったものである。「一寸」と呼び止められ、中を調べられ、米（闇米）と分ると没収されてしまうのである。最初のころはおかねでも買えたが、次第にそれでは買えず着物などを持って“物々交換”した貴重なお米を只取り上げられるものだから、千住新橋の交番を通る時は非常に緊張したものである。そんな苦い思い出のある交番がいつの間にか左側（上流）に移って少し大きくなっていたことが昔の橋を新しく架け替えるため壊された時の写真を最近見たらわかった。そうだ、キャンディーズの田中好子（スーちゃん）…このころ北側の乗降用の橋のコンクリートの壁にスーちゃん大好きとか、ファンのメッセージが消されても、消されてもすぐいっぱい書きこまれていたのを思い出した。…の田中屋がすぐそばにあった。中華料理の正華大飯店（正華の本店…現在はない）も見える。

これが昭和５０年である。そして新しい千住新橋になると交番はなくなってしまった。

西新井橋北側にあった交番
（昭和30年1月1日　）筆者提供

昭和３０年１月頃の西新井橋の北側に交番がある。新しい西新井橋になってなくなってしまった。

千住新橋の改良工事は昭和４８年。昭和５３年５月２６日国道４号線の拡幅工事にともなう千住新橋の上り車線部分

の新橋が完成し、開通式を行う。昭和５８年１２月１６日千住新橋歩道工事完了。

《小菅の渡しの桟橋》　（文　高原光雄）

小菅の渡し
「わたしたちの千四」

桟橋の場所は東武線の下り鉄橋沿いの下流側で、両岸に突き出るように桟橋が作られていた。

その後、小菅の渡しは１９４０年頃から船頭だった男性が戦争に行ったために廃止され、桟橋はそのまま放置されていた。

当時、お年寄りを除いた大人の男性は全て兵隊になったために、電車やバスの運転手も男性から女性に替わっていた。

１９１４年生まれの姉の話によると、父親は当時、刑期を終えて刑務所を出た人たちの相談相手になった保護司をしていた関係で、１９４８年に刑務所から桟橋の取り壊しを頼まれた。

水が冷たい春先で、中学１年生だった私は桟橋を壊す手伝いをした。

桟橋は川岸から川の真ん中に向って段段に下がっていた、私は父親と２人で桟橋の突端に３本の丸太を束ねた三叉を設置した。そしてクサリで滑車を巻き挙げるチエンブロックと言う機械を三叉にぶら下げて、クサリの先に付けたフックを桟橋の板や杭棒に結んで１本ずつ引き抜いた。

杭棒を抜きながら三叉を陸地へ移動して桟橋の板を剥がすのだが、桟橋が狭く足場が悪かったので、水の中に入って三叉を持ち上げるのに足が泥に埋まり抜け出すのに苦労をした。それで深く打ち込まれていた岸よりの杭棒を残したまま作業を終えた。

東武線上り鉄橋(複々線で増設した)の真下に現在でも杭棒が残ったままになっているが、地盤沈下のため当時の水面は現在より２m位低かったから杭棒が写真より多く出ていた。

小菅の渡しの桟橋跡
（平成１６年8月２０日）　筆者提供

尚、川岸の護岸は現在崩れているが当時は建設して２５年位しか経っていなかったので写真のような護岸があった（鹿浜橋の橋下に現存している）。

鹿浜橋下の昔の様子を伝える護岸
（平成１６年8月２０日）　筆者提供

《土手の上を走った青バス》　（文　三木美代子）

青バスについて東武博物館では昔のことなのであまりはっきり分からないとのこと。昔の記録は戦災で消失してしまった。昭和１３年頃、西新井大師から南千住まで走行したそうです。その時の会社は京成モーターバス（株）という。区間は４１キロ。

私が５、６才の頃、昭和１０年位かも知れない、荒川の土手上を青バスが走っていました。車体が青く塗られていたため青バスと呼ばれていました。正式名は知りませんが乗合自動車です。ボンネット型のバスで、角張った今のバスからくらべると半分くらいかもしれません。1日３～４往復位走っていました。西新井橋を渡り遠くの方から大きなエンジンの音が聞こえると、土手に見に行ったりしました。その頃は土手も低く目の前で見送ったものでした。また、青バスは停留所でなくても来るのがわかると、土手上で手を挙げれば止まってくれたりもした。乗客は５～６人位で一応外出着的な身だしなみで、キチンとつかまっていました。悪路をガタガタと走っていた。思い出せばのどかな毎日だったと思う。遊ぶことも生活も一緒で、時には八百屋、魚屋等買い物も手伝った。

西新井駅
「写真に刻み込まれた足立区50年の軌跡」
足立区役所提供

戦争が始まりいつの間にか通らなくなってしまった。

戦後は木炭車が走り、橋を渡る時は坂の下で降りて押して、平らなところへ上がると、みんなで乗ったものでした。

戦後の土手の上に通ったのは、都営バス、国際興業バスの２本くらいで、埼玉県川口駅より浅草を通り日本橋、東京駅八重洲口まで便利な交通でした。停留所は土手の上でオバケ煙突を

眺め、冬などは寒くて、富士山、筑波山、秩父連山を拝みながらの朝一番のバスに乗ったものです。

乗っている人は大体皆同じ様な顔ぶれでした。昭和４０年頃には便利だったバスも乗る人が少なくなり、また、道路が狭く自動車も多くなり廃線になってしまいました。西新井橋北詰より、終点東京駅八重洲口まで約３０～４０分くらいでした。昭和４５年頃だと思います。

子どもの頃は、土手に上がると上野の山が一望でき、国立博物館が見え、たくさんの樹木もありました。左側より南側を見ると、東京ガスのガスタンクも見え、あの当時は２個見え、時間によって、ガスタンクが大きくなったり、低くなったりするものでした。浅草松屋デパートのアドバルーンも上がっていたりしたのを思い出します。デパートは大きいものなのだと感じました。こんなことも今になるとなつかしい。荒川近くに住んでいるので思い出します。今の様子からは全然見当もつきません。

昭和２２年、東武鉄道が東武自動車を合併し、東武鉄道自動車部となる。この頃の運賃は終戦直後でもありましたが、昭和２２年は５０銭。都営バスは昭和４３年３０円均一でしたその後、東武バスは昭和５３年には１１０円になりました。

太平洋戦争後は西新井大師より三ノ輪を通り、浅草馬車道へも行っていました。現在は、西新井大師より北千住駅まで、本木地区を通り荒川(西新井橋)を渡っています。他にも荒川を渡るバスは多くありますが、私の家がある本木地区近くのバスのみを書きました。

《千住新橋(せんじゅしんばし)を渡っていた都バス》

（文　吉田千伊知）

西新井橋を通る都営バス
（昭和６０年）石坂満提供

昭和３０年代には千住新橋を北側におりた所に、千住車庫（現在の位置と大体同じ）から、上野(うえの)回り新橋行きと浅草(あさくさ)回りの新橋行きの２本があった。北千住駅行きがあったかどうかは覚えていない。全線３０円とやすい。なにしろ銀座の先の新橋まで行って３０円なのだから、時間もそんなにかからなかった。３、４０分位だったと思う。

その頃(ころ)は女性の車掌(しゃしょう)さんが乗っていて「発車オーライ、次は○○、○○でございます。」と案内する。制服制帽(せいふくせいぼう)で、「東京のバスガール」と

いう歌がヒットする程花形の職業であった。

そのほかに埼玉の草加から千住車庫経由東京駅行きが同じ料金で走っていた。東武バスは花畑車庫－北千住駅、他に走っていたかどうか定かではない。それが自動車の増加と共に所要時間がかかるようになり、また人件費がかさむ様になったため採算がとれなくなり、現在では上野回りはなくなり、浅草回りは雷門までと短縮され、逆に料金は２００円と大幅に上昇し、車掌はいなくなり、ワンマンカーとなった。草加－東京駅行きは廃線になってしまった。

戦争中から戦後にかけてガソリンが不足した時、代燃車として木炭バス（炭、又はまきを燃料とした）を走らせた。これは力が弱く坂などは人が押さないと登りきれない程馬力が弱かった。

《西新井橋北詰からバスに乗って》

（文　小林啓子）

西新井橋北詰バス停留所
（昭和６０年代）　石坂満提供

小学生時代西新井橋北詰から西に１０分位のところに住んでいたので、どこか出掛ける時には西新井橋北詰停留場からバスに乗った。西新井大師、関原、梅田方面、北千住駅、南千住駅、町屋駅、浅草寿町、入谷、鳩ヶ谷、川口方面へと四方八方に行けた。母の用事というのについていったり、盆や正月の楽しいお出掛けだったり、こまかく憶えていないが、バスに乗って出掛けるのは本当に楽しかった。入谷の団地に引っ越した知り合いをたずねて、土手の上をずっと走った日、バスの窓わくの中の荒川の流れを小さな家々を楽しく思い出す。

《柳原から荒川》　　**（斎木武弥）**

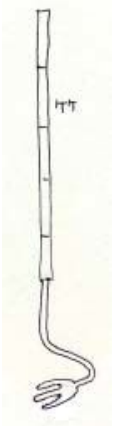
父が内務省に勤めており、荒川放水路の掘削のため、柳原に越して来ました。家の横は牛田掘の低い堤防で、反対側は牛田掘で、家の前は葦藪で遊びにはこと欠かなかった。カニ捕りヤンマ捕りと。

小学校は葛飾の南綾瀬第二尋常小学

小菅の渡し場に通じる道
「わたしたちの千四」

校の柳原分校で３年まででした。4年からは本校に行くことで大変でした。分校は荒川放水路の土手下にあり、写生とか、いろんな行事は土手でした。

荒川本流と土手の間に三新川があり、引き潮には砂場ができ、子どもの遊び場、カニ捕り、シジミとり、ウナギ捕り、上げ潮には小さな四つ手網で雑魚が捕れ楽しい思い出が多くあります。三新川は京成の鉄橋と東武の鉄橋の間で、東武の鉄橋の所に小菅の渡しがあり、春、秋の彼岸には刑の軽重によって青や赤の服を着た囚人が渡しに乗り、死刑になった人の墓掃除に行くと聞いたが定かでない。



三新川の砂の中にいるウナギをこれで捕まえる。

放水路ができた為、牛田堀は土手下から東武の牛田駅をすぎ墨田川までになった。千住に降った雨は大踏み切りの下を流れ旭町に出て、旭町から柳原まで大きな川となり、川筋に製紙会社があった。高崎製紙、甲子製紙が排水に川を利用していた。牛田堀も牛田駅のところに排水場が出来たので水は出なくなった。

《荒川における船運について》

（文　吉田昭三）

荒川放水路は河川敷と土手にはさまれて荷物を搬出するのに適していない。

船運が発達したのは、東京の下町の隅田川の流域である。そこには大小の工場があり物流が盛んであったからです。

西新井橋付近
（昭和50年頃）　石坂満提供

放水路の船運は東京湾から上流の埼玉県の方面に運ばれるので途中には荷物を出すところがないのが実情です。

これに変わる船運が栄えたのが隅田川である。これは江戸時代に地方からそして江戸からの物資の交流が盛んであった。

特に江戸１００万人の人々の暮らしを支えていたのは隅田川の船運であったといっても過言ではない。

この船運を語るには大昔から近代までの状況を見てゆかなければ解明できないのである。

まだ交通機関が発達していなかった江戸時代では自分の足が唯一つ

のたよりでしたから、とにかくひたすら歩きました。もちろん交通の手段として馬も船もありましたが、これはもっぱら武士階級のものでした。

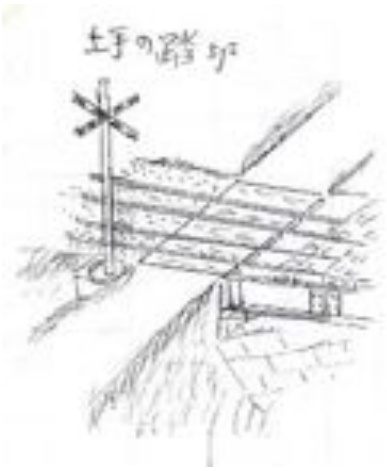
船を１番使ったのは都市から農村へ下肥、農村から江戸へは農作物を運ぶことでした。昔の農業は江戸の１００万人の人糞が頼りであったのです、家族の糞尿は１滴たりとも無駄にせず溜める。そして不足分は現金で買うのです。それを運ぶのに船を使います、このようなことが第２次世界戦争後まで続き、戦後、ＧＨＱが日本人の回虫の蔓延に驚き、そのときから下肥舟が無くなっていったのです。

工場で使う原料、また建築に使う砂利・砂、石炭等を運ぶ船運はしばらく続いていたのですが、道路が整備されて自動車が発達したことで衰退してしまったが、最近になって今度は大量の運送に船を使い始めてきました。そのルートは荒川を使っています。

昔、船から荷物を降ろすとき岸壁から２枚の渡り板を船まで渡して人足がパイスケと呼ばれていた籠を前後に担いで大勢で運んでいた風景を見ていたことがある。現在だったらベルトコンベアーを渡してというところである。当時は人間が機械であった時代である。

《荒川土手の踏み切り》

（文　斎木武弥）



荒川放水路の土手下に遊歩道が出来、今はマラソンの指定コースになり整備されたが、昭和の初めは、土手下から川で、堀切橋と、東武鉄道の鉄橋の間は、放水路と土手の間に三新川という川のような、沼のような所があり、川といっしょに上げ潮、引き潮があり、潮が引くと砂場が出来、子どもの遊び場、夏には水練場が出来た。三新川はシジミがよくとれ、ハゼ、マルタ、ウナギなどが釣れた。遊歩道がなく土手上を行く。堀切橋から京成電車の踏み切り、やがて東武電車の踏み切り、そして常磐線の踏み切りとあり、遊びに夢中で、バッタや蝶、トンボを追いながら、何度も踏み切りにはいり、警笛を鳴らされたことがあった。小菅の渡しも昼間だけの運行だった。堀切橋は今の隅田川に流れ込む水門のそばにあり木製で橋脚の前に障害よけの杭が立っていた。堀切橋と千住新橋の間は約２キロ、橋まで行くのが大

変なので鉄橋をわたる人がいて、列車が来て枕木にぶら下がり、難を逃れた人を見た。昭和の初めは今みたいに過密ダイヤでなく充分に時間があった。自殺者もたびたび見ている。河川敷も整備され土手が２段になって鉄橋を潜れば歩けるようになり、危険のために、初めは京成、そして東武、常磐と踏み切りがなくなった。土手上を行かれなくなり、暫らく違和感にとまどったことを覚えている。京成電車は昭和６年ごろに上野までの線が出来たと記憶している。堀切の京成電車の鉄橋の土手は昔のまま、線路の脇の土手を見ると堤防が１ｍ２０ｃｍ位高くなっているのがよくわかる。一度見るのも勉強になる。昭和７年に日中戦争から次々と戦争がつづき、やがて大東亜戦争（第二次世界大戦、太平洋戦争）となる。人々は軍需工場に徴用で中学生までが働いた時代、河川敷でウォーキングや散歩ができる今の人には考えられない時代であった。

《荒川鉄道橋と暮らし》

（高原光雄）

荒川に架かる常磐線と東武線の鉄道橋は〈鋼鉄製の鉄道トラス橋〉と言って、トラスの部分が川の上にだけあって河川敷の上は箱桁になっていた。１９６５年頃には現在の鉄道橋に架け替えられ、土手から土手までトラスになっているが、東武線の下り鉄道橋には川の部分に架かるトラスが昔のまま現存している、１９４６年頃の写真(「写真で見る東武鉄道８０年」より）と現在の様子を見比べると分かる。

満員の東武線 （１９４６年頃）
「写真で見る東武鉄道80年」

トラス部分でない橋は橋脚の間隔が１８ｍ位で現在の半分と狭くなっており、そこに架けた箱桁に枕木を横に並べ、その上に線路を敷いただけなので、枕木と枕木の間が大きく開いていた。また手摺や歩行用の金網などは無く、橋を歩いて渡るのは禁止されていたが、その枕木を跨ぎながら歩く人がいた。私は渡らなかったがトラスの部分以外では通過する列車を避ける逃げ場が全く無く、鉄道橋を渡った人は真下の河川敷を見ながら列車の危険を犯すことになり、すごく恐かったことと思う。

鉄道が通過する土手の踏み切りは、遮断機が無く古い枕木を何本か立ててリヤカー位しか通れないほど幅を狭くしてあった。

「写真で見る東武鉄道８０年」に掲載された写真には４６年当時の土手上に『１００ヤード先にＲＲ（踏切り）』と英語の標識が立っていた。当時日本には道路の禁止標識がなかった。また電車はドアが壊れて開いたまま、窓のガラスは割られて無く、寒い風が流れていた。

アメリカの標識が立つ土手上
（１９４６年頃）「写真で見る東武鉄道80年」

常磐線と東武線は小菅拘置所の裏手で大きくカーブしながら交差しているので、北千住方面へ向う汽車や電車は土手にいる人に注意するようにカーブ付近で警笛を鳴らしていた。当時、小菅駅は無かった。

１９６０年頃までは、街の騒音が無く静かだったので、毎夜１０時を過ぎた頃に、勉強をしていると遠くから警笛が聞こえた。今でもその侘びしい警笛の音が忘れられない。

１９５８年の初冬、常磐線で貨物列車を専門に引く蒸気機関車が電気機関車に変わることを知ったので、私は録音して記録しておこう思い、ゼンマイ式携帯録音機(通称デンスケ)を自転車に積んで常磐線の南側土手の踏み切りへ行った。

常磐線橋りょう踏み切り
石坂満提供

月明かりの夜で虫や鳥などの鳴き声は無く、自動車のクラクションも聞こえなかった。風はなく肌寒かった、私は踏み切り沿いに立ち列車が来る時間を待った。定刻より少し前に録音機を廻した。しかし２分過ぎても列車が来ないので急いでゼンマイを巻いた、ゼンマイは３分が限度だったからです。ゼンマイを巻き終わった時に汽車は見えなかったが川の先から汽笛の音がボーと聞こえ、段段と列車が近付き鉄道橋を渡り出した。Ｃ６２とプレートに書かれた蒸気機関車がダッ、ダッ、ダッ、ダッと蒸気と車輪の轟音を立てて通過してからガタ、ガタンゴトンと貨車が通り過ぎ、北千住駅の先へ消えて行った。

（参考資料）
「写真で見る東武鉄道８０年ー明治･大正･昭和三代の変遷」
東武鉄道株式会社　1977年11月1日発行

《下肥の話》　　（文と絵　鈴木芳夫）

下肥というのは糞尿を醗酵させたもので畑の肥料としたものです。水洗トイレが当たり前の今の時代、汲み取り便所といわれても、どんなものか想像しにくい人もいると思うが、水洗便所が普及しだしたのはそんなに古い話ではない。

話は戦前にさかのぼる。便所はどこの家ももちろん汲み取り式で、便槽に一杯になったころに汲み取りの人がくる。肥担桶に糞尿を汲み取る。普通は２桶で便槽はカラになり、桶は天秤棒の前後に１桶づつつるし下げ、肩に天秤棒をあてがい、運んでいく。道には牛車が待っていて、一台に桶を１６本程度積んで近郊の農家へと運んでいく。

農家は汲み取りの御礼に、野菜を置いていくのが例でした。農村から遠い大きな町の場合は肥おけを積んだ牛車から下肥専用の船に積み替え、東京の下町の場合、川の上流の埼玉県方面へ運ばれていった。

農家では肥溜めと呼ばれた大きな木樽を畑のすみ、道端に埋め、樽のふちを雨水が入らないように地面から少し高くし、北向きに屋根をつける。この樽に３ヶ月ぐらい貯え、十分に醗酵させてから下肥として畑に施す。

下肥専用の船は「おわいぶね」と呼ばれ、江戸のころよりまちを清潔に保つのに大切な存在でした。

戦後、肥料に化学肥料が多く用いられるようになり、手数のかかる下肥の利用が減りました。

需要は減っても供給は減りませんので農家にかわって、バキュームカーが各家庭の便槽から排泄物を吸い取り、大型の下肥専用船に移し変えて海洋投棄といって太平洋の黒潮に棄てていた時代がしばらくありました。

現在は下水道が完備し、下水処理場の汚泥消化タンクで完全に処理されているので、下肥といっても遠いはなしになってしまいました。

お手持ちの荒川の写真を
見せて下さいませんか

荒川の昔を伝える会

《おわい船》　（文と絵　斎木武弥）

昔（昭和６年ごろ）、便所は汲み取りで、業者が牛車又は馬車に汲み取りの桶を積んで、便所の汲み取りぐちから、柄杓で、一軒、一軒汲んだもので、桶が一杯になると天秤棒に桶をつるし牛車に運び、牛車に汲みとつた桶がいつ杯になると、牛田掘りに、停泊している、おわい船に、あけてまた汲み取りに行くの繰り返しで、運送もそのころはトラックでなく牛車か馬車が主流で道路もアスファルトでなくコンクリートで、馬も牛もすべるため牛用、馬用の草鞋をはいていた。馬の糞はテニスボールくらいの丸で道に点々とある。草食動物なので糞もぱさぱさしていたので乾くと風に舞う。牛の糞はパンのクロワッサンの大きくしたくらいの大きさ。牛も草食動物、これも乾くと風に舞う。それほど犬のふんとちがい汚いと感じていなかった。結構植木の肥料として便利に使っていた。

荒川放水路のために弥五郎新田よりの堀が中断され、その堀が土手の下より隅田川に続く牛田堀となり土手下よりお寺の裏の土橋、栄橋、中の橋（旭町と柳原を結ぶ）、大原橋（東町と旭町を結ぶ）とあり、大原橋のたもとに大きなおわい船が停留した。一杯になるまで、１週間ぐらい停泊する。船は、木の蓋で覆われ、綺麗に清掃され、汚物を積んでいると思えぬくらい船頭さんは何時もモップを持ち川の水で船体をあらっていた。船頭さんは、船の舳先のほうに住んでいて、６畳くらいの部屋は綺麗に整頓され、生活していた。中の橋のたもとには綾瀬館という芝居小屋があり、船の子と、旅芝居の子と箱木染工所の染めた生地の洗い場の池のほとりで砂で遊んだ記憶がある。オワイが満杯になると、牛田堀を漕ぎ出て牛田水門をくぐり、隅田川に出て曳舟（今のタグボート）に引かれて帰っていく。

質問: 汚物の中にはトイレットペーパーも混ざっているけどそのまま肥料として使えるのですか。

答え：紙も混ざっていて大丈夫。昔の紙は分解されやすかった。

質問: おわい船がなくなる頃から水洗トイレにかわったのですか。

答え: おわい船から水洗トイレになるまでには時間がかかりました。おわい船→バキュームカー→浄化槽→水洗トイレ。

質問: おわい船に動力はないのですか。

答え: 動力はありません。ポンポン蒸気をつんだ曳船でおわい舟を曳きました。曳船でひけるのは３艘くらいといわれていました。曳船がひくのは、おわい船が多かったようです。

《水上生活者との出会い》

（文　石坂満）

綾瀬川の肥え舟
（昭和30年頃）　足立区役所提供

昭和６、７年（１９３１～３２）頃放水路の右岸、千住新橋の下流５０メートル位のところに講武館と云う水練場があった。そこでの思い出話。八月の昼下がりの暑い日、千住新橋の橋下の岸辺に伝馬船が停泊していた。その船上に三､四才の女の子が遊んでいた。近寄って声をかけた「あぶないよ」「大丈夫、こっあたいの家だもん」と返事がきた。船の中からおばさんが出て来て「ごはんだよ中へおはいり」と声をかけた。はじめて船の中に生活する人が居ることを知った。放水路を往来する船に水上生活者の居ることも知った。当時は放水路、隅田川にはいろいろな船が往来していた。帆掛け船、竿差し船、櫓漕ぎ船、ポンポン蒸気船の曳航船などいろいろあり見ていても面白く楽しかった。各船とも川と海が作業場であり日陰は橋下が唯一の日陰場所で川岸のあるよい場所はなかなか当たらない。潮の干満の時間に合わせて停泊の場所を選ぶので大変とのことだ。

積載物は、土砂石、糞尿類が主で特に糞尿は大変だった。当時は水洗トイレは皆無だ。各家庭の便所から吸い取ったものを集めてのことだ。隅田川は両岸に河原はなく直接陸地であり荷揚げに便利のため材木問屋､木工工場などがあり､タンカーによる油脂類の貯蔵タンクも並んでいた。それは戦後もしばらく存在した。

話はガラリと変る。シベリヤからの復員後、昭和２４年頃、東京の

勝鬨橋
（昭和４５年１１月29日）石坂満提供

戦災、復興、米軍の状況、又自分自身の職探しを兼ねて都心の銀座、築地、月島方面へ自転車で出かけた。築地から月島方面に出かけ、勝鬨橋が健在だったことが嬉しかった。時間により橋桁が上がる光景はいまは見られない。月島に入り都心の近くでありながら戦災に遭わず町並も昔のままだったのには驚いた。電車通りに白い立派な建物があり、東京都立水上小学校と書いてあり興味をひき訪れて聞いた。水上生活者の子弟の寮であり小学校であること、船が横浜、千葉方面、又荒川上流へ長期の船旅に出向くときに子弟をあずかるところと聞かされた。当時の私には非常に印象に残った。以上、千住新橋と月島の２件が戦前、戦後に水上生活者との出会いについての記憶であり六十余年前のことだ。一昨年の秋、荒川の昔を伝える会で水上生活者のことが話題になり以上のことを述べたが、更に詳細なことが知りたいとの意向で中央区役所の資料室へ出向いて調べ、資料も荒川ビジターセンターへ送付していただき水上生活者の次のことが明らかになった。水上生活者の形成、河川別の世帯数、人口、収入、艀、伝馬船、その他の船種、屯数、等々この項でとり上げるより荒川ビジターセンターにて資料を参照されることで省略する。戦前、戦後も隅田川、放水路は物資輸送には自動車に代わる輸送の主力で東京電力の火力発電所、通称オバケ煙突の発電も隅田川沿いにあり、石炭、油脂の燃料が円滑に補給出来たので発電がスムーズに出来、下町の戦後の電力不足や、戦後の経済発展にも貢献したものと思い、その下支えが水上生活者であり、その労苦に感謝したいと思います。

《台風の洪水と土手と》　　（文　高原光雄）

日本は太平洋戦争のために山の木をたくさん切ったので多くの山が丸坊主になり、台風で大雨が降ると直ぐに大量の水が流れ、各地の川が溢れて洪水に襲われるなど危険な状態になっていた。

荒川の北側にあった私の家は１９６０年頃までときどき大水(洪水)になり床上浸水の被害に遭った。大水になると学校が休みになったので、私は古い材木で筏を作り竹竿で漕ぎながら近所の路地を廻った。どの家も玄関戸が半分くらい水に浸かっていて、話声が殆ど聞こえずひっそりと静かだったのを覚えている。床上浸水の家では畳を持ち上

げて机など台の上に重ねて置き、ローソクの明かりで食べ物も無くお腹をすかしていた。

１９４７年のキャサリーン台風の時は、台風が過ぎた直後にはまだ道路が浸水していなかったので私は近所の人と一緒に土手に登った、すると濁流が足元まで来ていたので驚き恐ろしかった。近くの千住新橋を見ると流されて来た３ｍ～４ｍ位の流木が何本も橋の桁にドーンと音を立ててぶつかり今にも欄干を乗り越える勢いだった。大人たちは橋が押し流されるかもしれないと心配顔で見守っていたのを覚えている。その後、水位が下がって土手の被害は無かったが、次の日、私の家は利根川の堤防が決壊して流れ出た水が溜まったために床上浸水になった。

１９５８年９月２７日に関東地方を襲った狩野川台風（台風２２号）の時は、荒川鉄橋が危険のため東武線が不通になり私の家は床上浸水になった、私は勤め先に泊まり２日後の昼過ぎに自宅へ帰ろうと千住新橋を渡っていて驚いた、荒川の水位は土手上から５ｍ位下まで減っていたが、北側の土手の上に消防自動車が何台も列んで止まり、住宅地の水を汲み上げて荒川へ流していた。当時は排水機場が無かったため緊急に消防自動車を使って排水していたのである。私はズボンと靴を脱いで頭の上に乗せ、一面洪水に浸かった善立寺前の旧日光街道を千住掘りに落ちないように気を付けて太ももまで水に浸かりながら家へ帰った。

この台風の洪水で木造の堀切橋が流された。当時、現場で橋の警戒をしていて状況を目撃した。建設会社に勤めていた梅田２丁目の板倉信夫さんの話によると、水かさが増して濁流が橋桁に達し、堀切橋が揺れ出したので通行止めにしようとした時に、１台の小型トラックが走って来て橋をガタゴトと渡り出した。そして渡り切った途端、橋が大きく蛇のようにくねくねと曲がり出して、橋の真ん中がバリバリと音を立てて壊れて濁流に流されて行った。トラックの荷台に〈デンスケ劇団〉と書かれ、「当時、浅草の演芸場で人気があった名前なので覚えている」と言うことでした。

現在、山は木が茂り一見では太平洋戦争以前の姿に戻ったように見えるが、間伐などの手入れが行なわれていないために倒木が多く山は荒れはてている。

過去、１８８５年の大洪水で千住大橋が流されたが、１７６７年に架け替えから１１８年後の事であり、その間の洪水には耐えていた。

もし関東地方が２百年に一度はあると言う超大型台風が荒川の水源地に大量の雨を降らし、荒川が再び濁流に襲われた場合を考えると私は

恐ろしく、私は台風が来るたびに土手へ見に行っている。

土手は高く嵩上げされ補強している。橋も堅牢になったとは言え、河川敷には多数の可動式トイレや施設が設置されており、万一、洪水警報が出て荒川に大量の濁流と流木が押し寄せたらどうなるのか、短時間に多数の施設を土手の上へ移動するのは大仕事だと思う。

また土手の雑草を刈ったまま放置しているために、その枯れ草が腐敗して雑草の根を枯らし土手の赤土が露出している場所を多く見かける、その赤土が濁流に削り取られて土手が決壊することも危惧される。

大量の倒木が激流と共に橋桁に音を立ててぶつかり、壊れた工作物が浮き沈みながら流され、土手が決壊する光景が目に浮かび、皆で洪水対策を考えなくてはいけないと思う。

写真のように舟に乗せてもらって避難した。（1958年） 足立４丁目（当時の末広町） 吉田千伊知提供

《伊勢湾台風》　　（小林啓子）

１９５９年９月２７日、大型台風がやって来た。大雨が降ればすぐに下水ははんらんし水があふれ道路は冠水。床下浸水となる。素足にゲタで登校し、校庭で消毒薬の入ったバケツで足を洗い、教室に入ることなど日常的にあった。すさまじい雨と風がやみ、近所の人声も物音もふっとなくなり、静かな時が流れていた。中学生の兄と小学生の私は自宅待機、父母は仕事に出ていた。と、いきなり床下から水が上り始めた。みるみる上ってくる。父母がいればタタミを上げていた頃だ。とりあえず兄と二階に上っていようとしていたら外で呼ぶ声がする。田舟に乗った男の人が町会の人だと言って、「小学校に老人と子どもは避難することになったので、学校の勉強道具と洗面具を持っておいで」と言われ、ランドセルにあわてて準備した。舟に乗って家を離れるときは心細く、さびしくなった。「後からお母さんも来るから大丈夫。」となぐさめられ、水のないところで降ろされた。

避難所の本木東小学校はその頃出来たばかりの新しい校舎できれいだったが、この教室に入ってと言われたところに見知った顔はみつからず、部屋中が人・人・人。夕食にいただいたカンパンは堅くてうまく飲み込めない。隅っこで心細くなった頃、母がずぶぬれになってやって来た。「ものすごい水の量だから３、４日は引かないだろうよ。ここまで水があったよ。」と母は自分の首のところを指した。２日目か３日目

か、初めてあたたかいおにぎりが出た。ほんとうにおいしかった。母がふかして持ってきたさつまいももごちそうだった。大人はずい分と心配が多かったろうが子どもの私は仲間が見つかれば遊び始め、子ども達は一団となって遊び放題、騒いでは叱られた。少しずつ帰宅する人もいてだんだん落ちつき、一週間で私も家にもどれることになった。前の家の庭の窪みに５メートル位の水たまりが残っていて、そこにフナや金魚がパチパチはねているのを見た時は、びっくりするやらおかしいやら、家にランドセルを入れるとさっそく水たまりで遊んだ。

《映画の荒川》　　（吉田千伊知）

昭和３０年の西新井橋
筆者提供

１.「煙突の見える場所」（昭和２８年）。ベルリン映画祭国際平和賞受賞、五所平之助監督、田中絹代・上原謙・高峰秀子出演。

「皆さんは、東京の”オバケ煙突”というのを御存知ですか？」という男（上原謙）のナレーションから、この映画は始まる。それにつれて四本煙突の上空からの撮影。「これです…何故そんな名がついたと云えば…」カメラが横移動し煙突が三本二本一本になるシーンを見せる。モクモクと黒い煙を吐く煙突は、まるで勇ましい産業戦士の様に頼もしい。こうやって千住のお化け煙突は全国的になった。主役夫婦の家は荒川の土手のすぐ下の二階家（千住八千代町…今の梅田一丁目）である。その二階の間借り人が二人（高峰秀子・芥川比呂志）向かいのラジオ屋、拝み屋を含めた人間模様を描いた作品である。原作は椎名麟三の「無邪気な人々」で千住とは関係ない作品だが監督の五所平之助の意向で、「常磐線で日暮里から松戸のほうへ行くと、煙突が重なり合っていく。荒川土手の、ある場所に立つと一本に見える。それでふっと考えたのが、人は、所が変わると考え方が変わるんじゃないか。しかし、人間の求めるものは何だ。人間はひとつのことを、ひとつの真理を求めているのではないかと、これが私の主張だったの。つまり平和でありたい、自由でありたい、平等でありたい、愛を持ちたい、この四つの柱が、四本の煙突はそれを象徴する。」……（「お化け煙突の世界」佐藤忠男著）

そこで、この映画は荒川の土手、千住界隈、西新井橋（木橋）、京成の鉄橋など荒川、足立の風景がたっぷり観られる。実は主人公夫婦の撮

影風景を見物したことがある。田中絹代、上原謙を観て感動したものである。当時有名な大スターをぢかに見られたのだから当然である。

２.「東京湾」（昭和３７年）野村芳太郎監督、西村晃、玉川伊佐夫、葵京子出演。

映画の冒頭、「大東京、－人口一千万人のマンモス都市、これはその激しい生存競争の一コマである」とタイトルが出る。空中からのカメラが過密都市東京をとらえていく。「交通戦争」という言葉が流行語になったのは前年の昭和３６年のことだが、その車社会を反映するかのように、東京湾の船から麻薬を受け取った運び屋が、ブツを渡そうと日本橋の裏通りで何者かにビルの屋上から狙撃されて殺される。この運び屋は実は麻薬組織を内偵中の厚生省の麻薬捜査官で、この犯人を捜査するのが西村晃（築地署の刑事）と石崎二郎（若手刑事）の二人。捜査が進むにつれ、立石、新宿、渋谷、池袋、最後に浮かび上がった狙撃犯は意外にもベテラン刑事の戦友（玉川伊佐男）だった。刑事がその家を訪ねて行くと、荒川放水路でボート小屋をやっている。（ちょうど西新井橋の袂（南の千住側）でまだ木の橋の時代である。）少し頭が弱いが純真な若い女性（葵京子）と暮らしている。終戦後復員したら許嫁は結婚していたなどから、金欲しさに狙撃犯になったのである。放水路のボート小屋はそんな男の隠れ家みたいな家にふさわしい。小屋からはまぢかにお化け煙突が見える。刑事の西村とかつての戦友玉川と一緒にモーターボートに乗って放水路を下っていくシーンがあって、荒川の昔の風景が見られる貴重な場面がある。ラストは走る夜行列車のなかで格闘し、二人ともデッキから振り落とされ死んでいく、悲劇的な結末となる。

松島トモ子のロケバス回りは人でいっぱい。千住新橋近くの土手。
（昭和30年）　筆者提供

３.お化け煙突の見られる映画は、まだある。野村孝監督「いつでも夢を」昭和３８年、日活、吉永小百合主演、浜田光夫、橋幸夫。

町医者（信欣三）の娘で、冒頭で荒川土手を自転車の後ろへ父を乗せて看護婦姿の吉永が元気いっぱいペダルをこぐ。また木造の西新井橋を渡っているシーンもある。向かいの本木にある浜田の家へ向かっているのだ。そして彼女のバックには”お化け煙突”の勇姿が見える。そしてラストは荒川と隅田川が間近になっている木造の江北橋付近を自

転車で行く二人の姿。”いつでも夢を”の歌をバックに。

４．「東京物語」小津安二郎監督（昭和２８年、松竹）原節子、笠智衆、杉村春子。

尾道に住んでいる両親（笠、東山千栄子）が上京して、子どもたちの家を訪ねる。長男（山村聡）の家は東武線「堀切駅」のすぐそばである（「スグ土手ノ下」と平山医院の看板があるからわかる）。東山が孫の小さな男の子と遊ぶシーンがあった。間違いなく荒川の土手である。５４年前の風景である。長女の杉村春子は都電の走る通り沿いで美容室を営んでいる。美容室のシーンの前に”お化け煙突”が写っている。だからやはり千住である。美容師の長女は忙しくって、あまり両親の面倒をみられない。そして次の兄弟へと、たらい回しの様に。戦時した次男の嫁（原節子）は会社を休んで観光バスで東京見物させて、他人の嫁が一番よく面倒をみてくれたという話。

千住シネマ開館　千住柳町
（昭和３０年１月）筆者提供

５．「女が階段を上る時」成瀬巳喜男監督（昭和３５年、東宝）高峰秀子、加東大介。

銀座のバーのマダム（高峰）が町工場の工場主（加東）を訪ねる場面で遠くに”四本煙突”が見える。

６．「下町の太陽」山田洋次監督（松竹、昭和３８年）倍賞千恵子、勝呂誉、早川保。

「男はつらいよ」の山田監督の初の長編映画である。「いつでも夢を」と同じでヒット歌謡曲の映画化作品である。荒川駅（平成６年に八広駅に変わった）の傍の荒川土手の風景が出てくる。遠景だが”お化け煙突”も見える。

７．「綴方教室」（昭和１３年、東宝）山本嘉次郎監督、高峰秀子、徳川夢声、滝沢修。

小学生だった豊田正子の「綴方集」の映画化作品。松竹映画の子役だった高峰が東宝へ移ってから主演した佳作である。貧しい職人の娘が書いた綴方がベストセラーになり評判になった。葛飾区の四木あたりの荒川が見られる貴重な作品。一寸長雨になると、まだ舗装されていない道はすぐぬかるむ。担任の先生が滝沢修、父親が徳川夢声。母親が清川虹子。高峰少女時代の「馬」とともに代表作である。

８．「吹けよ春風」（昭和２８年、谷口千吉監督、東宝）三船敏郎、山

根寿子、山村聡。

タクシーの運転手からみた客たちの人生模様を描いた作品。千住新橋の北側の土手の上で三船敏郎と山根寿子の客のからみのシーンのロケ風景を見物したことを今でもはっきり覚えている。「酔いどれ天使」でスターになった三船だが、「七人の侍」（昭和２９年）で国際的スターになる前の作品である。

９．「ためらふ勿れ若人よ」（昭和１０年、日活、多摩川）田口哲監督、原節子、滝口新太郎

伝説的美女、原節子１５歳のデビュー作である。思春期映画で相手役は学生で人気のあった滝口新太郎（後にソ連国外脱走をした岡田芳子と結婚した）である。日本で初めての学園もので、学校のシーンは足立中学校(現在の旭町の足立学園）で撮られたそうである。オール千住ロケだったため、「みんなでロケを見に行った。ラストシーンがね。千住新橋なの。橋の上からセーラー服を着た原節子が手を振って。下には船に乗って別れていく滝口新太郎が詰めえりで学生帽をかぶっていてね。もうぐっときちゃうシーンだよ。」と日の出町在住の大塚甚三さん（７４）が「町雑誌千住　VOL.13　特集荒川　PART1」（２００２年５月発行）のなかで言っておられる。

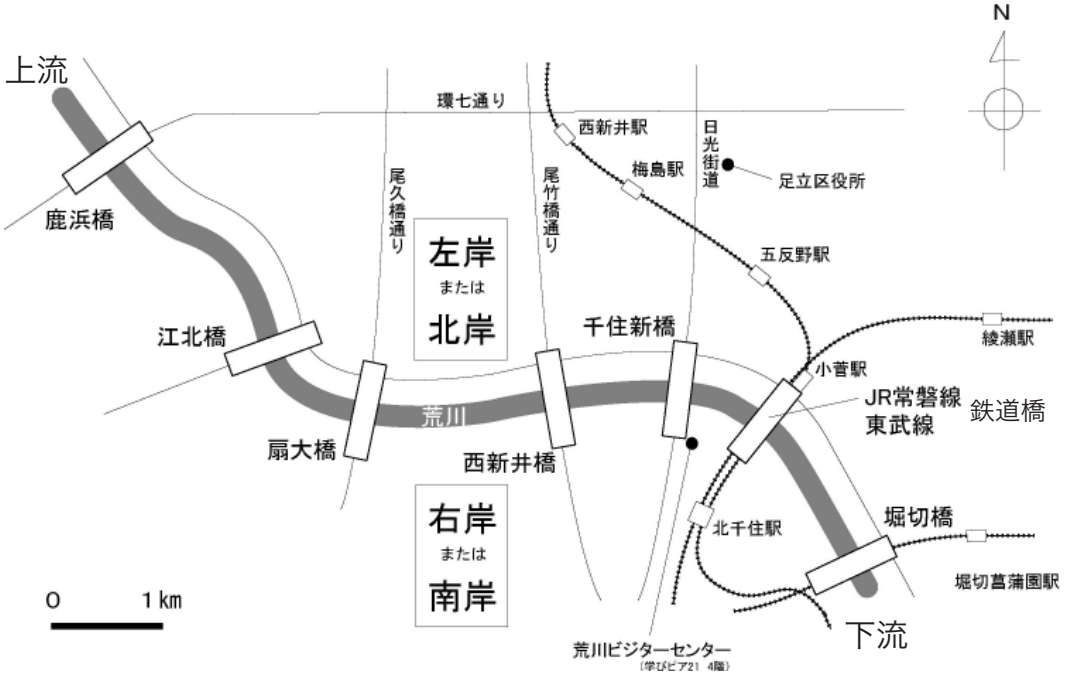
梅田金美館
（昭和３０年）筆者提供

質問: ロケになぜ荒川が使われたのですか。どの辺が魅力だったのですか。

答え: 荒川（放水路）が出来てから８０年近くもたつと、本家の隅田川より、自然の川に見え、広大な景色、かつてあった木橋の西新井橋、堀切橋とか、お化け煙突と云われた対象物、鳥・魚・虫・草花の自然にあふれた景色が魅力だったのではないか、数多くの作品のロケーションが行われたのも当然だったのではないか。

（参考資料）
「町雑誌千住　VOL.13　特集荒川　PART1」 千住･町･元気･探検隊　2002年５月発行
「『お化け煙突』 の世界」　佐藤忠男著　ノーベル書房　1977年発行
「銀幕の東京」　川本三郎著　中央公論社　1999年５月発行

足立区を流れる荒川の両岸の呼び方



西暦・年号 早見表

年号	西暦	年号	西暦	年号	西暦
昭和 元年	1926	**昭和** 22年	1947	**昭和** 43年	1968
2年	1927	23年	1948	44年	1969
3年	1928	24年	1949	45年	1970
4年	1929	25年	1950	46年	1971
5年	1930	26年	1951	47年	1972
6年	1931	27年	1952	48年	1973
7年	1932	28年	1953	49年	1974
8年	1933	29年	1954	50年	1975
9年	1934	30年	1955	51年	1976
10年	1935	31年	1956	52年	1977
11年	1936	32年	1957	53年	1978
12年	1937	33年	1958	54年	1979
13年	1938	34年	1959	55年	1980
14年	1939	35年	1960	56年	1981
15年	1940	36年	1961	57年	1982
16年	1941	37年	1962	58年	1983
17年	1942	38年	1963	59年	1984
18年	1943	39年	1964	60年	1985
19年	1944	40年	1965	61年	1986
20年	1945	41年	1966	62年	1987
21年	1946	42年	1967	63年	1988
				64年 平成元年	1989

＊本文中に西暦と年号が混在している場合があります。早見表を参考にしてください。

西暦　年号がすばやく分かる方法

大正〇年＋ 11 ＝西暦
昭和〇年＋ 25 ＝西暦

例)
昭和 25 年＋ 25 年＝西暦 1950 年となります。

「荒川の昔ー暮らしー」暮らし地図

この本に出てくるお話は、足立区内のどのあたりのできごとでしょうか。お話をお伺いした方々と「荒川の昔－暮らし－」編集メンバーの住んでいる場所を下の地図に入れました。

荒川の昔―暮らし―
編集メンバー

① 石坂満
② 遠藤浩
③ 小林啓子
④ 斉木武弥
⑤ 鈴木芳夫
⑥ 高原光雄
⑦ 則竹秀子
⑧ 三木美代子
⑨ 吉田昭三
⑩ 吉田千伊知

お話をお伺いした
地元の方々

あ 阿出川信夫さん
い 阿出川八郎さん
う 新井正一さん
え 石井武さん
お 井上金蔵さん
か 川澄巖さん
き 川名安之介さん
く 清水義允さん
け 下川億一さん
こ 下川清さん
さ 田ケ谷正久さん
し 田中善一郎さん
す 増田紀二六さん
せ 柳川峰造さん
そ 横山佐吉さん

（五十音順）

「荒川の昔 - 暮らし -」
編集メンバー紹介

（五十順）

・今住んでいる所
・年数は荒川とのつきあい暦
・生まれた年

石坂満
・本木北町
・77年
・1922年

50年程前、 仕事で区内を回っている間に町の変化に気づいた。写真を記録として残さなければならないと撮り続けている。

遠藤浩
・綾瀬
・6年
・1941年

千代田線で荒川を渡る時に富士山を見るだけで,是非にも河川敷から見てみたい。これからも荒川の昔の話を聞けるのが楽しみです。

小林啓子
・栗原
・48年
・1951年

荒川土手と河川敷。幼い日の思い出のほとんどがこの場所にあった。記憶の中から立ち上る様々な事柄は、せつなくもなつかしい。

斎木武弥
・柳原
・81年
・1922年

荒川河川敷を歩いて25年。河川敷の人気者斉木さんのパワーがとハイタッチをする人10人を越える日も。自分のために歩いている。

鈴木芳夫
・本木南町
・79年
・1927年

会でこどもの頃の記憶を呼び戻すことが楽しみ。昭和の初期 （10年前後） は、川を掘って間がなく、 川岸は壁が切立っていた。

高原光雄
・梅田
・62年
・1935年

今の荒川には昔と同じ魚が泳いでいるが、 食料不足だった昔の子どもは、 食べる目的で釣り竿や四つ手網で魚を捕えた。 豊かな今は？

則竹秀子
・宮城
・31年
・1933年

荒川は水が流れているだけではなかった。色んな歴史やロマンがあり、全ての生物のくらしの場。自然の美しさを壊さず、明日へつなぎたい。

三木美代子
・本木南町
・76年
・1929年

昔の放水路土手はきれいだった。土手の上に上がると、「ずいぶん広いな」と感じた。昔はのんびりしていた、 時間も人間も。

吉田昭三
・新田
・71年
・1928年

昔の荒川土手は子どもの声でにぎやかでした。私たちは、この荒川をいつまでも大切にして、美しく守っていきましょう。

吉田千伊知
・千住
・72年
・1931年

5歳くらいの時、 隣の子と三輪車で荒川へ行ったのが最初だと思う。虫捕り、魚捕り、水練場と遊んだ思い出がいっぱいの所である。

ご協力下さった方々
（五十音順、敬称略）

お忙しい中
ご協力ありがとうございました。

阿出川信夫　下川　億一
阿出川八郎　下川　清
新井　正一　田ヶ谷正久
石井　武　田中善一郎
井上　金蔵　増田紀ニ六
川澄　巖　柳川　峰造
川名安之介　横山　佐吉
清水　義允

荒川の昔を伝える会会員
（五十音順）

石坂　満　高原　光雄
遠藤　浩　則竹　秀子
小林　啓子　三木美代子
斉木　武弥　吉田　昭三
鈴木　芳夫　吉田千伊知

編集後記

執筆と編集の皆様の荒川と地域に対する愛情と関心の深さがよくわかります。ご苦労様です。今後ともよろしくお願い致します。

（石坂満）

荒川の昔 －暮らし－

発行日　2007年3月31日
発行　足立区荒川ビジターセンター
編集　荒川の昔を伝える会
〒120-0034
足立区千住5-13-5
「学びピア21」4階
Tel　03-5813-3753
Fax　03-3870-8544
E-mail　ara-vc@adachi.ne.jp
http://www.adachi.ne.jp/users/ara-vc/

カット　荒川の昔を伝える会会員
編集　遠藤　浩・小林　啓子
則竹　秀子
荒川ビジターセンタースタッフ
熊谷　梓・高橋　美帆
山下　美晴

「荒川の昔　暮らし」　荒川（放水路）・社会の歴史

この本に出てくる話は、すべて足立区内の荒川でのできごとです。身近な荒川の話も、社会の大きな出来事や足立区の歴史と深く関係しています。年表の左側は社会の出来事です。右側は、「荒川の昔− 暮らし」の編集メンバーの、この本に載っている記憶を中心とした荒川の歴史です。

で　き　ご　と ☆印は荒川に関係する歴史	西暦 年号	足立区の荒川　記憶からの歴史
☆1910年　関東地方に大雨、南足立郡全体に大水害荒川放水路、改修計画が起こる。 **☆1911年　荒川放水路工事着手** **☆1912年　用地買収移転などの協議、および建設機械の製作購入などに着手。** **2月　アメリカへ荒川堤の桜苗(五色桜)3000本を送る** 中華民国成立(中国)	1910 明治43年 ～ 1912 明治45年	明治40年　宮城町レンガ産業最盛期頃まで
☆1914年　8月　大暴風雨による浸水により放水路工事遅延。 第一次世界大戦おこる(～1918年) **☆1920年**　旧千住新橋　建設開始 **☆1922年　3月11日　西新井橋完成** 5月　王子電気軌道経営の荒川遊園地開園 1923年　9月１日　関東大震災発生 **☆1924年　3月 岩淵水門完成、隅田水門完成** **6月20日 千住新橋の完成に伴い、新荒川放水路全川にわたり通水する。** **☆1925年　江北橋完成** **☆1926年　小名木川閘門完成** **東京電燈(現東京電力)の千住火力発電所完成(お化け煙突)** **日本放送協会設立**	1914 大正３年 ～ 1926 大正15年 昭和元年	1924年頃　放水路工事で立ち退いた家　宇田川さん、阿出川さん、小泉さん（小台）、田ヶ谷さん。 1924年　　小菅の渡し開通
☆1930年　荒川放水路完成 1931年　9月 満州事変起こる 1932年　日中戦争 足立区設立(市郡併合により東京市域が拡大)南足立郡の３町(千住町、西荒井町、梅島町)と７カ村(綾瀬村、東淵江村、花畑村、淵江村、伊興村、舎人村、江北村)が足立区になる。 5月 5・15事件起こる 1937年　7月 日中戦争始まる **☆1941年　7月 台風により荒川洪水** **荒川放水路河川敷の農地化進む** 12月8日 太平洋戦争始まる 1945年　東京大空襲、3月10日、4月13、14日 8月 広島、長崎に原爆投下 8月15日 太平洋戦争終わる 1946年　11月3日 日本国憲法公布	1928 昭和2年 ～ 1945 昭和20年	昭和初め　太田の渡しが運行 1931年　小学3年生の時初めて水上生活者に会い、遊んだ。 1932年　大雨による出水で、本木に金魚が流されてきた。梅島の山田養魚場は東武線を造るための土盛に必要な土を掘られた池で、そこから流れた。 1932年　西新井橋交番が町の有志の出資でできる。民間が作って警察署に差し上げた。 1935年頃　ワンドでバケツ一杯のシジミが取れた。 イエコウモリ(アブラコウモリ)が飛び回っていた。 「国民皆泳」のもと水練場で泳ぎの練習。 堀切から新橋門土手上が通行できなくなった。 京成の鉄橋ができた。 西新井橋上流千住側に大きな池があった。 1941年　堤北（荒川の北側）で用水路が切れて洪水になると「橋向こうに水が出た」と千住の人は言っていた。 1942年頃　北千住駅は貨物列車が主体の駅で、駅からのバスはでていない。 1942か43年　小菅の渡し終わる 1945年頃　江北橋の近くで、空襲をうけ、橋の下に逃げこむ。 (戦後)　秋頃から千住新橋を挟んだ日光街道に闇市がたつ。 (戦後)　河川敷で禁止されている田んぼを作っているか、宮城地区を通り西新井橋まで見回りしていた。

で き ご と ☆印は荒川に関係する歴史	西暦 年号	足立区の荒川　記憶からの歴史
		1946年　千住新橋上り車線でアメリカ兵にガムをもらった。
		1947年　カスリーン台風による濁流で千住新橋が流されそうになっていた。
☆1948年　3月31日 荒川堤防敷地での耕作禁止	1946 昭和21年	千住新橋で対面交通守らず怒られた。
12月 経済安定9原則の指示		千住新橋を挟んだ日光街道に露店が多く出ていた。
1949年　8月13日 千住の花火大会復活	～	1948年　小菅の渡しの桟橋を取り壊した。
3月 ドッジライン(デフレ政策)の指示		
道路交通法改正	1953 昭和28年	戦後　土手の嵩上げ2回はしていた
		1950年　6月　朝鮮動乱。これが要因で景気が上向く。
1953年　2月1日 NHKテレビ放送開始　8月28日、民放テレビ放送開始		1952年　千寿第5小学校にプールができる。その前に水練場はなくなっていた。
		1955年頃まで　本木小学校校歌「西に富士、東につくば～♪」の通り、富士山、筑波山がよく見えた。日光連山も見えた。
		田畑多かった。
		1955年頃　橋のたもとに必ずといっていい程、交番があった。
		昭和30年代　千住車庫～新橋に2本の都営バスが運行。料金一律。
☆1960年　水質悪化で悪臭が立つため、花火大会は中止。		1955年以降　汲み取った糞尿は小台橋(小台)のたもとにある船に載せて東京湾へ捨てに行っていた。戦前は役所の人が回収。金肥と呼ばれていた。
☆1961年　6月1日 西新井橋近代橋完成	1954 昭和29年	1956年　千住新橋の両側に歩道が付け足され、幅が7.2mから17mに。
10月 「足立区納涼大会」は区民芸能大会として、秋に開催となった。		
6月 農業基本法成立		1958年　荒川沿いは工場が多かった。家具屋の木工所、ベニヤ工場（宮城、小台）、メッキ屋、革工場（家内工業でランドセルなどを作るのが盛んだった。）
1962年　5月 地下鉄日比谷線(北千住～人形町)開通	～	常磐線から蒸気機関車廃止
		足をくじいて名倉接骨院に診てもらったとき、放水路工事で名倉が移転しなかったのは、薬の木が移動できないためと聞いた。別の会員の記憶では、薬の木は「ニワトコ」という種類。
1963年　アメリカ合衆国大統領ケネディ暗殺		
1964年　京成成田線橋梁～江北橋間堤防嵩上げ 東海道新幹線開通 10月10日 東京オリンピック開催	1965 昭和40年	1958年か59年　川口のあたりで芝川の土手が切れた。千住に住んでいて畳を急いであげた。だんだん水が来た。水がついた畳は乾かないので捨てた。
☆1965年　2月12日 新神谷橋と鹿浜橋が、片側だけ完成して開通。同年、環状七号線が足立区に延びた。		1958年　狩野川台風。荒川を渡る鉄橋が危険なため、東武線不通。消防自動車のポンプで住宅地の水を吸い上げ荒川へ流していた。
施行の新河川法により「荒川放水路」から「一級河川荒川」となり、岩淵水門から下流の旧荒川を隅田川とした。		1960年頃　都立水上小学校閉校
		1960年頃まで　蹄鉄屋が西新井橋を下りたところにあった。牛にはわらじをはかせた。
文化大革命(中国)		1965年頃　河川敷の田んぼを写真に撮った。
		1965年頃まで　まちの中に養豚場、養鶏場、牧場があった。
☆1966年　6月21日 江北橋近代橋完成		1966年頃　堤北の芝川から綾瀬川間で排水機場の整備進み、洪水が少なくなった。整備には長い時間がかかった。
1966年　ビートルズが来日		
☆1968年　5月10日 環七鹿浜橋完成		
小笠原諸島返還		
学生運動激化	1966 昭和41年	
荒川線以外の都電を廃止		
1969年　12月　地下鉄千代田線(北千住～大手町)開通		1975年頃　メッキ屋からの有害ガスがなくなってきた。
☆1970年　「水質汚濁防止法」制定。汚濁発生源の規制がなされ、荒川の水質が大幅に改善するきっかけとなる。	～	1978年　100人で釣り大会を千住新橋近くで行うが1匹も釣れなかった。 千住新橋架け替え、親柱など旧千住新橋の面影無くなる。
大阪で日本万国博覧会開催		
☆1975年　千住新橋改良工事	1983 昭和58年	1981年　荒川にカモが今と比べ物にならない位多くいる写真を撮った。
1978年　千住新橋かけかえられる		千住新橋近くでアユが釣れたと記事になる。読売新聞10.13、読売新聞江東板10.11
1983年　12月16日 千住新橋歩道工事完了		1982か83年　足立区内で床上浸水15軒あった。犬がほえて水がきていることに気付いた。